— ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ —

青少年育成活動・支援活動　研究報告・事例集

YOKOHAMA　EYE'S　2014

－ ヨコハマ アイズ －

公益財団法人　よこはまユース

青少年育成活動・支援活動　　研究報告・事例集
YOKOHAMA EYE'S 2014

平成２７年３月　発行

■編集・発行
公益財団法人　よこはまユース
〒231-8454　横浜市中区住吉町4-42-1　関内ホール地下１階
TEL：045-662-3716　FAX：664-6254
Mail:soumu@yokohama-youth/jp
URL:http://www.yokohama-youth.jp/

青少年育成活動・支援活動　研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2014

平成27年３月

■編集委員

尾崎万里奈　小野美幸　鈴木薫子　髙橋勇一　七澤淳子　平野嘉昭　吉田智之

※執筆者の所属はすべて平成27年２月28日現在のものです。

″EYES″は、

Every **Y**outh, **E**xtensive **S**upport（すべての青少年に幅広い支援を！）を略し、

青少年を見守り、育てる複数の目、育つ芽、そして愛をイメージしています。

「青少年を温かく見守り、応援しよう」という思いがひろがっていきますように…。

はじめに

今年度の「YOKOHAMA EYE'S」は、青少年育成事業や取り組みにおいて法人が日ごろから大切にしている“人とつながる、人が広がる”をテーマとしました。

昨今、地域のつながりが希薄になっていると言われていますが、青少年を見守り育てる取り組みの重要性は強く意識されており、さまざまな地域・団体で青少年に対する取り組みが盛んに行なわれています。

しかし、多様化する青少年課題に、一つの地域・団体や個人で取り組もうとすると、青少年と向きあう地域の大人の広がりや取り組みの継続という課題に直面することが多くあります。よこはまユースでは、これら直面する課題に対して、地域・団体、個人はもちろん、関係機関とつながること、そして地域活動の情報発信を通して“活動をつなげる”お手伝いができればと考えています。

今回掲載した論文は、このような観点から職員それぞれの実践事例や特色ある地域活動について「つながり・広がる」というキーワードがどのような重要性を持ち、青少年支援の輪にどのように結びついているのか、或いは中間支援組織に期待される役割などについて執筆しております。また、活動実践者や研究者からの寄稿もいただき、全体として充実した内容となっております。

これらが現在活動されている皆さま、これから活動しようとする皆さまにとって、有益な事例報告となり、また問題提起となれば幸いです。

最後になりましたが、本誌の発行に際し、ご協力いただきました執筆者や関係者の皆様に感謝申し上げると共に、今後とも当法人活動へのご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年３月
公益財団法人よこはまユース
代表理事　三田　　修

YOKOHAMA EYE'S 2014

目　　次

テーマ『人とつながる・人が広がる　～地域・青少年・コーディネート～』

第１部　人とつながる・人が広がる

地域とつながる開かれた放課後キッズクラブを目指して
鈴木　薫子……２

青少年施設における「ロビーワーク」の意義と課題
尾崎　万里奈……６

“つながる”効果－青少年の居場所づくり講座を通して見えたこと
村石　早紀……11

次世代へつなぐ地域活動～横浜市立岡村中学校区の活動から～
早川　惟子……15

「多文化まちづくり工房」の取組み
吉田　智之……19

【特別寄稿】「場の力」×ちえのわ・人のわ
神奈川区地域子育て支援拠点かなーちぇ施設長　塚原　　泉……23

【特別寄稿】青少年育成の「中間支援組織」が担う役割
神奈川大学・東京学芸大学講師　久田　邦明……28

第２部　事業報告

野島青少年研修センターにおける地域の人材とのつながり
富岡　克之……34

つながりが、新たなつながりを生んだ第１回「横浜 子ども・青少年に関わる活動関係者の大交流会」
阿久津　強……37

ユースワークの「評価」を考える－３都市相互評価会議から－
七澤　淳子……40

第１部　人とつながる・人が広がる

地域とつながる開かれた放課後キッズクラブを目指して
鈴木　薫子
青少年施設における「ロビーワーク」の意義と課題
尾崎　万里奈
“つながる”効果ー青少年の居場所づくり講座を通して見たこと
村石　早紀
次世代へつなぐ地域活動～横浜市立岡村中学校区の活動から～
早川　惟子
「多文化まちづくり工房」の取組み
吉田　智之
【特別寄稿】「場の力」×ちえのわ・人のわ
神奈川区地域子育て支援拠点かなーちぇ施設長　塚原　　泉
【特別寄稿】青少年育成の「中間支援組織」が担う役割
神奈川大学・東京学芸大学講師　久田　邦明

地域とつながる開かれた放課後キッズクラブを目指して

公益財団法人よこはまユース　放課後事業課　鈴木　薫子

横浜市の放課後施策

横浜市では昭和38年度から留守家庭児童の生活の場として「放課後児童クラブ」（以下学童）が始まった。その後徐々に都市化がすすむにつれ、小学生が放課後に安全に遊べる場が求められ、平成５年度から市内の小学校で遊び・異年齢交流の場として「はまっ子ふれあいスクール」（以下はまっ子）が開設した。平成16年度からは新たに留守家庭児童の生活の場と遊び・異年齢交流の場を兼ねた「放課後キッズクラブ」（以下キッズクラブ）が始まった。

平成26年４月現在、学童は180か所あり、また、横浜市内の小学校は全部で346校のうち254か所ではまっ子が、92か所でキッズクラブが開設されている。平成27年２月現在、よこはまユースは18か所のキッズクラブを運営している。

平成24年８月に成立した子ども・子育て関連３法では、市町村が地域の実状に応じた子ども・子育て支援の充実を図ることとされ、平成27年度からは「放課後児童育成施策基本方針」を改訂することとなり、この新法の成立・施行にあたり市内のはまっ子が開設しているすべての小学校で、はまっ子からキッズクラブへと転換されることとなった。

詳しくは下記ホームページを参照。

横浜市こども青少年局放課後児童育成課
http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/houkago/houkago/

地域で子どもを育てるために

よこはまユースの理念は「すべての青少年が周囲の人々から見守られ、人のつながりのなかで成長していくことができる社会を醸成するとともに、様々な体験を通じ青少年自らが学び育つ機会を提供することにより、未来を担う青少年の成長に寄与する」ことである。ここでいう周囲の人々＝地域の人々であり、特にキッズクラブの運営では“地域に開かれたキッズクラブ”“地域の子どもは地域で育てる”ことを目指してプログラムを企画し、日々子どもたちと関わっている。

地域というと人によって範囲や概念が異なるが今回はキッズクラブ＝小学校区でとらえていきたい。

地域のつながり、関係が徐々になくなりつつあると言われている。昔のように地域のコミュニケーションが良く図れた時代は終わりに向かいつつあり、課題として地域の人のことを地域の人がよく知らないという現状もある。

このような地域社会の人間関係の希薄化という状況があると言われるなかで、子どもたちは今も昔も変わらず地域のなかで育っていく。

地域と子どもの成長

まず、地域は物理的なスペースだけで語られるのではなく、その場所に住む人たちによって語られるものである。いくらその場所にいい物的資源があっても使う人がいなければないのと同じで、地域や土地の風土は人によってつくられている。

人は他者に出会うことで成長する。他者に出会って新しいことを知り、自分以外の考えを知り、刺激をうけ自身に還元していく。同じように子どもたちも他者に出会って成長していくが、この機会がどんどん少なくなってきているのではないだろうか。いまの40代、50代の大人たちが子どもだったころ、地域には気にかけてくれる「おせっかい」な大人がいた。時代がすすむにつれ少しずつそういう大人は減ってきた。また、地域以外で過ごせる場所や時間―例えば学習塾や習い事、スポーツクラブ、各種団体によるイベントなど―が増えたことや、地域行事の担い手の減少で行事の頻度自体は変わらないにも関わらず、地域で活動する大人がいくら呼びかけても子どもたちの参加数は減り、地域での交流ができなくなってしまっている。

このような社会の状況の変化や地域社会での人間関係の希薄化が子どもたちの成長する機会を減らしているといえるだろう。だからこそ、大人が子どもたちに地域と関わるような機会をつくっていくこと、選択肢を増やしていくことが求められている。

学校では身近な地域に出ていくような授業を積極的に行い、地域に対する関心度を高めている。では学校でも家庭でもないキッズクラブができることはなんだろうか。

今回、よこはまユースが運営するキッズクラブで①「キッズクラブから見た地域」と②「地域からみたキッズクラブ」にわけて主任指導員にインタビューを行ったので紹介したい。

事例①キッズクラブからみた地域
「空き缶みこし」

Ｘ小学校放課後キッズクラブのＡ主任指導員は５月に開催されたキッズクラブの運営に関する評議会のなかで出てきたアイディアである、“リサイクル×創作物”で何かプログラムができないかと考えていた。

意外と子どもたちのプログラムで使うことのなかった空き缶に注目し、そのことを補助指導員（パートタイムスタッフ）に相談したところ、隣町で空き缶みこしを作っていることを聞いた。すぐに見学に行き、キッズクラブオリジナルの設計図を書き上げた。

学校にも協力をあおぎ、保護者に積極的に声をかけて空き缶約300個を集めた。木材を切りだして土台をつくったのは青少年指導員を中心とした大人たちで、空き缶を組み立てたのは子どもたちだった。意図的に仕事や役割を分担して「みんなで作った」とそれぞれが言えるように仕組んだ。そうすることで知らない大人と子どもの間に達成感と仲間感によるつながりが生まれた。

実は地域の町内会では、夏祭りでおみこしを担ぐ人がいなくて困っており、そこで双方の希望が一致したこともあって、完成した４メートルにもなるおみこしを子どもたち20人が担ぐこととなった。そのとき町内会から子どもたち全員分の法被が提供された。

おみこし制作の様子

このキッズクラブでは他にも餅つき、芋煮会、ペットボトルロケットなど地域と一緒に何かをする、地域にでていくようなプログラムを多く実施している。このようなプログラムを通じて「子どもたちは新鮮な発見がある」、「大人たちの関係が密になり、情報の共有ができるようになる」とＡ主任はいう。

プログラムを通して地域にいる子育ての終

わっている大人と子どもの間で「〇〇ちゃん、この間おみこし担いでたね」「今日はどこに行くの？」というやりとりが生まれていくそうだ。顔が見えなかった子ども、顔しかみえていなかった関係者同士がキッズクラブのプログラムによってつながっていった事例だ。

うまくいっているような地域との協力体制であっても悩みや葛藤は多い。

Ａ主任はこの地域に住んでいるわけではなく、５年前に人事異動でやってきた。少しでも早く地域にとけこもうと、キッズニュース（月に１回発行されるキッズクラブのお便り）を自分の足で直接渡しに出向いたり、イベントや会議を絶好の機会として会話を交わしたりして関係性を築いていった。少しずつ少しずつ築いた関係と信頼があったからこそ、協力してくれる人も多くあらわれ、「空き缶みこし」は成功した。

その反面「これからどうつなげていくかが大切だ」という。人と人との関係性は目に見えるものではないし、ものとして残すことは難しい。同じ指導員がずっと同じキッズクラブにいられるわけれはないので、次にどうつなげていくかを考えて取り組んでいる。

「キッズクラブの役割は、点をどんどん打っていくこととその打った点を結んでいくこと。なにか係を割り振られたり、会議に出ないといけないのでイベントが面倒だと思う人もいる。する前からしたくないと思っている人が増えている。点をたくさんつくるためにも喰わず嫌いにしておくのではなく、どうしたらまず参加してもらえるかを考えていきたい」と考えＡ主任は地域との関わりがあるプログラムに取り組んでいる。

事例②地域からみたキッズクラブ

Ｙ小学校放課後キッズクラブのK主任指導員はY小学校区に住み、10年以上キッズクラブに携わっている。また、地域の主任児童委員を務めていることもあり、青少年指導員やスポーツ推進委員、地域の団体と合同で様々な事業を行っている。

ある地域の会議のときにＫ主任のもとへ相談がもちかけられた。「今度、区の大会につながる紙飛行機大会をするのだが、できるだけ多くの子どもに参加してほしいと考えている。キッズクラブを通じて集められないだろうか」。早速Ｋ主任はキッズクラブのプログラムとして紙飛行機大会を実施したところ、多くの子どもが集まり、とても楽しい時間になった。

このキッズクラブでは地域とのつながりから実施するプログラムが多い。地域のイベントにつながる扉があるということは、子どもたちがまちを歩いているだけで顔を知る大人に出会えるということだ。また、紙飛行機大会の場合には、Ｋ主任の地域とのつながりが、仕事であるキッズクラブの活動に結び付いた。子どもたちは楽しい体験をすることができ、大人はイベントが成功し、キッズクラブ以外の場所で人同士がつながっていったプログラムであった。この例から、地域と子どもたちをつなぐ役割をキッズクラブが担っていると言える。こういった多様な体験と他者との出会いをとおして子どもたちは成長していく。

「お互いもちつもたれつだから」、「いつどこで助けてもらえるかわからない。お互い様」とＫ主任はいう。

前述のようにスポーツクラブや習い事、学習塾や多種イベントにより、地域のイベントには、なかなか子どもは集まらないのが現状だ。そこでキッズクラブと地域がプログラムを通じてつながることで、子どもたちが体験を通して成長するというプラスの関係性が生まれる。

紙飛行機大会で記念撮影

こういったプログラムで「子どもたちの姿を大人に見てもらうこと」ができるし、子どもたちの新しい世界がひろがっていく。参加者が減っているという課題についてもキッズクラブでは「子どもを集めること」ができる。その強みが地域に活かされている。

「子どもと地域をつなげば、いずれ大人になって帰ってきてくれて地域に何かを還元してくれる」ことを願い、日々キッズクラブと地域の顔としてＫ主任は活躍している。

地域の大人と子どものつながり

キッズクラブや放課後事業は小学校に通う６年間しか利用することができない。いくらスタッフと子どもの間でよい関係が築けていたとしてもキッズクラブ内での関係性は卒業した時点で終わってしまう。それはスタッフ-子どもだけでなく、教師にとっても同じことで、ずっと教師-児童という形で子どもたちに関わり続けることはできない。この６年間という限定された期間、しくみとして限定せざるを得ない期間は大人が決めた枠組みである。そのしくみのなかでは、どれだけ気になる子どもであっても去る者を追うことはできない。

しかし地域は違う。多くの子どもたちは小学校から中学校の過程で同じ地域で育っていく。高校や大学進学、就職でその土地を離れることがあっても地域での関係性は続く。

「地域の子どもは地域で育てる」とは、社会のしくみのなかで関係性を続けていくことが難しい子どもたちに、途切れることのない支援を続けていけるということである。

キッズクラブでの活動はまさに地域と子どもたちをつなげていく事例である。わたしたち大人もそうだろうが、子どもも「顔だけ知っている大人」が実は多いのではないだろうか。よくいくお店の店員や最寄駅の駅員、〇〇くんのおじいさんといった大人たちのなかで子どもたちは育っていく。その顔だけ＝点のつながりを結んで線にしてどんどんひろげていくことが、キッズクラブや子どもと関われる立場にいる大人の役割なのだろうと思う。そうして結ばれていった線がどこまでのびていくのか、子どもの育ちの可能性は無限大である。インタビュー中に「子どもにとって家族以外の最初の社会は地域だと思う。その小さな社会の入り口をキッズクラブで作っていきたい」とＡ主任が言っていたのがとても印象的であった。

「開かれたキッズクラブを目指す」とは地域とのつながり、人とのひろがりによって子どもの可能性をどこまでもひろげることである。子どもの成長には大人同士の「つながり」や「ひろがり」が必要だ。

ときには青少年育成分野の専門性のある大人が青少年に寄り添うことが必要であるが、実際青少年に関わることのできる周りにいる大人たちの大多数は「ふつうの」大人たちである。よこはまユースでは青少年を応援する団体であると同時に青少年の周りにいる大人たちも応援する団体だ。その「ふつうの」大人たちこそが青少年の選択肢を増やし、成長の可能性をひろげていく。小学生というこれからの未来に向かう子どもたちを育てるキッズクラブが、地域と子どもをつなげる役目を果たし、大人同士のつながりを作る中心的中継地点としても機能していきたい。

青少年施設における「ロビーワーク」の意義と課題

公益財団法人よこはまユース　横浜市青少年交流センター　尾崎　万里奈

はじめに

横浜市青少年交流センター（以下、交流センター）は、2002年12月に開館した青少年施設である。青少年活動の支援、青少年育成を支える人材育成、多様な体験機会の提供の３つを柱に、青少年が社会性を育み、「大人」になるための助走期間を過ごす場所として、青少年の「居場所づくり」に取り組んでいる。

そして、この施設を利用する青少年に対して、部屋の貸出や体験プログラムを提供するだけではなく、青少年とスタッフとの間に「顔の見える関係」を築くための日常的な関わりを「ロビーワーク」と呼び、居場所づくりの柱となる取り組みとして、日々実践している。

本稿では、この「居場所づくり」の手法としてのロビーワークの意義と課題、そして今後の展望について考察する。

青少年施設における「ロビーワーク」

まず、施設の概要を説明しておきたい。

横浜市青少年交流センターは、横浜市西区に立地する５階建ての建物である。大小の会議室、音楽スタジオ、レクリエーション・ホール（体育館）、料理室など、さまざまな利用目的に対応した部屋があり、青少年から大人まで、登録すれば誰でも利用することができる。また、１階のロビーと自習室はフリースペースになっており、近隣の小中学校に通う子どもから通学圏内の高校生、自主活動で施設を利用している大学生～大人まで、幅広い年代の人々が行き交う空間になっている。さらに、４階にあるレクリエーション・ホール（以下、レクホール）は午後１時半から５時半まで開放されていて、曜日ごとに異なる種目のスポーツを楽しむことができる。このフリースペース、レクホール、そして利用するひと誰もが通りかかる１階の受付カウンターが、交流センターにおけるロビーワークの中心的な場になっている。

また、施設にはセンター長を含む常勤職員５人、時給職員（コーディネーター）11人の合計16人がシフト制で勤務している。20代から60代まで幅広い年代と経歴のメンバーで構成されており、青少年に関わる活動経験の長い人もいれば、全くの未経験という人もいる。

受付カウンターでの利用受付や貸出業務、レクホール開放時の見守りなどを担うコーディネーターは、青少年と関わる場面も多いロビーワークの“要”であり、人生経験豊かな30代～60代のメンバーが中心である。

最後に、ロビーワークの対象についても整理しておきたい。前述の通り、交流センターは青少年施設でありながら、青少年から大人まで、だれでも自由に利用することができる。そのためスタッフがロビーワークを通して働きかける対象は必ずしも青少年だけではない。部屋を利用する大人に対しても同じように声をかけ、働きかける。こうした大人とのやりとりも、広い意味ではロビーワークと言えるのだが、交流センターでは、特に青少年との関わりを「日常的な相談・助言」事業として位置付け、重点的に取り組んでいる。なかでも、フリースペースやレクホールを最も日常的に利用している近隣の

小・中学生、高校生世代をロビーワークの中心となる対象として位置付けている。

日常的な関わりとしての「ロビーワーク」

それでは、交流センターにおけるロビーワークとは、具体的にどのように実践されているのだろうか。青少年とスタッフのやり取りを、少しだけ取り上げたい。

【ある平日の午前、受付カウンターにて】
青少年A：（一人で来館。受付を素通りして、そのままフリースペースに向かおうとする）
スタッフB：こんにちは～。（受付名簿に）名前書いてね。
青少年A：後で書くから。（といってそのまま、フリースペースの奥へ）
スタッフB：いま書いてよ～！
青少年A：（聞いていない）
青少年A：（少し経って、受付に戻ってくる）
スタッフB：書いて、書いて。（といって受付名簿を差し出す）
青少年A：（しょうがない、という感じで受付名簿に記名。カウンターの椅子に座る）
スタッフC：今日早いね。学校は？
青少年A：イチキタしてきた。
スタッフB：イチキタ？
青少年A：一時帰宅。５限目始まるまでに学校戻るから。
スタッフC：えー？それって大丈夫なの？先生は知ってるの？
青少年A：担任も知ってる。いいよって言われたし。クラスに友達いないからつまんない。
スタッフC：そうなんだ…。じゃあ、お昼食べたら学校に戻るのね。後でまた声かけるね。
青少年A：おー（といって、フリースペースに戻っていく）

これは、スタッフとは顔見知りの関係で、ある程度の関係性ができている中学生とのやりとりである。

私たちが日常的に取り組んでいるロビーワークとは、このような“雑談”か“世間話”のような会話の積み重ねであり、特別なことをやっているという意識は少ない。スタッフ自身も「交流センターの職員」という以上の看板を背負うことはなく、「顔見知りのおじさん／おばさん（お兄さん／お姉さん）」という立ち位置で声をかけることがほとんどである。

もちろん、こうした日々の関わりの中で、彼らが抱えている悩みや生きづらさ、置かれている困難な状況を見聞きすることは少なくない。しかし、これらの悩みや課題を、彼らはあくまでも「話した」のであり、「解決を求めて相談した」のではない。場合によっては、本人に相談先を紹介するケースや学校・支援機関に相談するケースもあるが、多くの場合、スタッフは彼らの話を聞き、受け止める。話すことで気が済むこともあれば、具体的な助言を求める場合もある。時には青少年自身が置かれている（客観的に見れば）困難な状況を雑談まじりに話してくれることもあるが、聞き手であるスタッフに課題解決を期待してはいない。

例にあげた青少年Ａが「クラスに友達がいない」ことを理由に「学校を抜け出してきた」という事実に対して、スタッフとしてできることはほとんどない。しかし、学校で所在ない思いをしているAが、気持ちを吐き出し、ひと息つける場を提供することで、Ａが自らの課題に向き合う後押しをすることはできる。

交流センターで取り組むロビーワークの目的は課題解決そのものではない。私たちが日常生活の中で交わすようなコミュニケーションをすること、それが可能になるような関係性を築くことがロビーワークの目的であり、そのためには、来るもの拒まずの「開かれた場」と、そこにいる「誰か」が必要なのである。そして、「支援」や「相談」という色の付いていないからこそできる関わりを可能にしているのが、「居場所」とい

う場づくりなのである。

「居場所」と「ロビーワーク」

このようにロビーワークとは、支援や相談の専門家ではない施設スタッフによる日常的な声かけ、会話等による関係性の構築の手法であり、なんでもない場所（空間）を「居場所」としてつくりあげていくための意図的な働きかけであると言える。

それでは、こうした「居場所」での関わり（あるいは関係性）は、青少年にとってのどのような意味を持つのだろうか。

冒頭で述べた通り、交流センターは「青少年の社会性を育み、『大人』になるための助走期間を過ごす場所」としての「居場所づくり」を目的としている。

つまり、私たちが目指す「居場所」とは、青少年自身にとっての「居場所」であると同時に、そこにやってくる青少年が、将来、大人として社会に参加する時に求められる社会性を育むための場であり、そこで実践されるロビーワークもまた、２つの側面をもっている。

ひとつは、関係性を築くための働きかけであり、もうひとつが築かれた関係性を土台とした社会性を育むための働きかけである。

もちろん、なにをもって社会性とするかは、社会的背景や文化、その人自身の価値観や立場など様々な要因で異なる。大雑把に言ってしまえば、一人ではなく社会という集団の中で生活するための能力と言えるだろうが、挨拶の仕方から働き方まで、幅広い意味合いをもっている。

交流センターにおいても、社会性の決まった定義があるわけではない。何を社会性と考え、育んでいくのかは、スタッフそれぞれに委ねられている。挨拶や言葉づかいといった基本的な部分は共通しているが、その先の「あるべき大人像」は、それぞれに異なっている。

例えば「受付での飲食」にどのように対応するべきかという見解はスタッフによって異なる。１階の受付カウンターは、部屋の予約や貸出といった手続きを行う場所であり、そこにはいくつかの椅子が置かれている。ときどき、この受付に座ってカップラーメンやジュース、持参した弁当を食べ始める青少年がいる。ひとりで食事をしたくない、仲間と離れてスタッフと話がしたいなど、その行動にはさまざまな青少年の思いが透けてみえる時もある。

この「受付での飲食」に対して、「他の人に迷惑をかけない」という節度、あるいは「飲食禁止の場所では飲食しない」というマナーを大切にするという立場のスタッフは、注意をしてやめるように促す。一方で、「誰かと一緒に食事をしたい」という欲求を満たし、彼らとの関係性を築くことが社会性を育んでいくためにも大切だと考えるスタッフは、「今回に限って」や「他の利用者がいない間だけ」といった条件をつけて、受け入れる。

どちらの対応が正しいという「正解」はなく、それぞれのスタッフが、自身の考え方によってその場での対応を考えていく。共通のルールを決めた方が良い場合には、スタッフで話し合い、その時々に対応を決めていく。このような小さな関わりの積み重ねを通して、社会性を育んでいくのである。

こうした青少年のニーズとスタッフの対応の対立は、本当に些細なことから喫煙や飲酒といった法に触れる問題まで、数え切れないほど繰り返される。ある意味では、この対立の時こそが、彼らの社会性を育てるまたとない機会であると考えている。

このように、交流センターでは、スタッフがロビーワークを通じて青少年のニーズを受け止め、時に社会のルールを教えることで、青少年と社会の間で揺れながら、青少年の社会性を育む「居場所づくり」に取り組んでいる。

また、声かけや雑談のようなコミュニケー

ションを中心としながら、スポーツや料理、ゲーム、園芸、料理、アートなど、スタッフが各々の得意分野を生かすことで、ロビーワークを通して育まれる関係性や社会性は、より豊かで広がりのあるものになっている。何かしらの専門性を軸とした関わりではないからこそ、スタッフはその人自身の知識やスキル、特技を生かすことができる一方で、ひとりの人間として青少年に向き合う「覚悟」が求められる。

ロビーワークの「成果」と言えるもの

それでは、ロビーワークの成果と言えるものはあるのだろうか。定員や対象の決まったプログラムとしてではなく、日常的な関わりとして実践されているロビーワークの成果を言葉にすることは難しい。そもそも、成長の最中にある彼らはこれといった意図的な働きかけがなくとも、日々変化している。中学生の時にスタッフの呼びかけに悪態をついていた青少年が高校生になってきちんと挨拶するようになった、というような変化は、年齢に応じた成長と区別することはむずかしい。

あるいは、端的にロビーワークを通して関わった青少年の数という成果の測り方もありえるだろうが、その数が十分なのかどうかを判断するための根拠を明らかにしないうちは、数による成果測定もあまり意味をなさないように思える。

こうした評価に関する議論は別の機会に譲るとして、実際に現場のスタッフがロビーワークの「成果」として受け止めているのは、青少年からのさまざまな形でのフィードバックである。

交流センターを日常的に利用する青少年の多くは、卒業や進学、就職など様々なライフ・イベントをきっかけに、交流センターから巣立っていく。

そして、こうして巣立っていった青少年が、数年後に再び交流センターを訪れ、当時の様子を懐かしそうに語り、その後の人生やいまの自分のことを報告しにきてくれることがある。就職や結婚といった転機の時もあれば、近くに来たついでにと言って立ち寄ってくれることもある。その当時に働いていたスタッフの名前をあげ、「●●さんは、今日はいないんですか？」と聞かれたことも、一度や二度ではない。

彼らが「大人」になったのは、彼ら自身の努力や成長によるものであり、ロビーワークの「成果」であると言える根拠はない。しかし、年月を経て再び来館してくれるのは、交流センターが、少なくとも彼らにとっての「居場所」になっていたことの証ではないかと感じている。

利用者自身からの数年越しのフィードバックは、第３者には伝わりづらい「成果」であることは否めない。しかし、ロビーワークの「成果」と確かに言えるものは、成長した青少年自身の姿なのである。

ロビーワークの課題と展望

最後に、ロビーワークの課題と展望について触れておきたい。

これまで見てきたように、ロビーワークとは声かけや雑談といった日常的なコミュニケーションを通して、青少年との関係性を築き、社会性を育むための働きかけであり、「居場所づくり」の手法である。対象は限定されず、誰にでも同じように声をかけ、小さな関わりを積み重ねていく。

そして、誰でも目的を問わず利用できる「居場所」であるがゆえに、来館する青少年の背景はさまざまである。これまでも、一見すると「普通の子」だが家族や友人には相談しづらい悩みを抱えているといった、目には見えくい課題を抱えている青少年の声に耳を傾け、ロビーワークを通して彼らの悩みや課題に一緒に向き合ってきた。

しかし、近年、青少年を取り巻く環境は非常に厳しいものになっている。交流センターに

やってくる青少年との関わりにおいても、彼らが抱える困難な状況を見聞きする機会が非常に増えている。

複雑な家庭環境に育ち、家庭にも学校にも地域にも「居場所」を見出すことができない青少年にとって、交流センターという「居場所」でさまざまな大人や他の青少年と出会い、関係性を築くことは、決して無意味なことではない。ともすれば、家庭では頼れる大人がおらず、学校にも滅多に姿を見せない彼らは、交流センターを通して、細く社会とつながっている。こうしたつながりを持ち続けることは、青少年にとってのみならず、彼らを育む社会にとっても意味のあることだろう。

その一方で、彼らが直面している個別の具体的な困難は、私たち施設のスタッフが容易に解決しうるものではないことも事実である。

例えば、養育環境に問題があり、いつもお腹を空かせている子どもに対して、その時々に食事を提供することは不可能ではない。あるいは、家に帰れない／帰りたくない事情があり、夜遅い時間までフリースペースで過ごしている青少年を受け入れることも難しくない。

しかし、こうした関わりによって解決するのは一時的な問題だけで、その子ども自身が生きていく環境を変えることはできない。こうした課題を抱える青少年に対しては、施設の中で抱え込むのではなく、保護者や学校あるいは児童相談所のような支援機関につなぐことで、青少年にとってその時必要な支援が受けられるようにつなげることが「居場所」の役割だと考えている。

また、こうした青少年の多くは、家庭や学校、地域に「居場所」を見出すことができず、社会との接点を失っている場合も多い。自らの力で社会に出て行く力のない彼らにとっては、誰でも目的を問わず利用できる「居場所」は、単なる通過点ではなく、「生きる場所」そのものになってしまい、そこに滞留してしまう。

こうした「居場所」の出口をなかなか見つけられない青少年に対しては、彼らが力を蓄えて自分自身で社会に出ていけるようになるのを待つことと同時に、彼らが社会の中に新たな「居場所」を見つけられるようにつないでいくことが必要になってくる。青少年と社会との間に立ち、両者をゆるやかに結びつけていくことが、青少年の「居場所」に今後求められるのではないだろうか。

終わりに

「ロビーワーク」とは、決して特別な技術や知識といった専門性によって実践されるものではない。それはあくまで私たちの日常生活の延長線上にあるものであり、挨拶や雑談といった日常的な関わりを積み重ねていくことで、関係性を築くという手法である。そして、日常生活に終わりがないように、「ロビーワーク」にも終わりはない。私たちが向き合うのは地域の青少年であり、彼らがそこにいる限り、彼らの存在に目を向け、気にかける「大人」の必要性が薄らぐことはないように思える。こうした大人が青少年と関わり、見守ることができる場所が、地域の中に少しでも増えていくことで、悩みや課題を抱えてつらい思いをする青少年や、頼るべき大人がおらず社会の中で孤立する青少年が減り、将来私たちの社会の一員として活躍する健やかな青少年が増えていくのではないだろうか。交流センターの「居場所づくり」が、そうした取り組みのひとつとして、地域の青少年育成に貢献できるよう今後も取り組んでいきたい。

“つながる”効果－青少年の居場所づくり講座を通して見えたこと

公益財団法人よこはまユース　横浜市青少年育成センター　村石　早紀

はじめに

居場所と似た言葉に、サードプレイスがある。第１の場所(ファーストプレイス)である家、第２の場所(セカンドプレイス)である職場や学校、その両者を結ぶ中間の「第３の場所」を指し、都市居住者にはこの３つの居場所が必要であると言われている[1)]。

居場所をサードプレイスと考えた時、青少年の居場所には親や教師ではない第三者の大人の存在が重要になってくる。

公益財団法人よこはまユース(以下、よこはまユース)は、青少年が第三者の大人＝地域の大人たちを含めた周囲の人々に見守られ、人とのつながりの中で成長していける社会を作り出していくことを目的としており、横浜市青少年育成センター(以下、育成センター)は、そのような“青少年を見守る人々”を支援していく施設だ。

「実践から学ぶ“青少年の居場所”とは(以下、居場所講座)」は、育成センターが主催する連続講座であり、青少年を見守る地域の大人のすそ野を広げることを目的としている。今回、この居場所講座を通して生まれた人のつながりについて検証することで、今後の育成センターの役割について考えたい。

1　講座の概要

青少年の“居場所”について実践と研究の視点から話を聴き、考える居場所講座は、今年で４回目を迎えた。

育成センターは、講座・研修の対象を市内全域としているため、横浜市内の多方面から人が集まり、参加者はさまざまな情報や事例に触れることができる。参加者がグループ別の話し合いなどを通して、自分の活動事例を発信しつつ、他の参加者の事例を知ることで、自分の活動を別の視点から学ぶことができる。

このような考え方を基本として、「居場所講座」を企画した。まず、講師やゲストスピーカーから居場所について話を聞くことで、地域や居場所において青少年にどう関わったらよいかを学ぶ機会を提供する。次に人・場所(空間)・時間がどのように交差することで青少年にとって居場所となりえるのか、大人には何ができるのか講座を通して考えていく。そして、参加者同士が情報を交換することで、地域を超えた“つながり”を持つことをねらいとした。

講座は講師からの講義だけでなく、参加者がグループで話し合いを進めていく中で自分に合った“青少年との関わり方”を見つけていけるようになっている。一人の人の話だけでなく、複数の実践者と研究者の話を聞くために約2か月に及ぶ連続の構成だ。

今年度の講座では、過去のアンケート結果などを考慮し、参加者がより目的意識や課題を認識できるよう導入講義を工夫した。各回のテーマや講師のプロフィールの他、ねらいをしっかりと伝え、参加者が「この回で持ち帰りたいこと」などにつて文章化し、明確にした。また、その声を講師に事前に伝えることで、

各回の参加者の期待とのミスマッチがないように対応した。

〔表１〕

平成26年度
導　入：９月16日（火） テーマ：地域の大人が子ども・若者にできること 内　容：各回の趣旨説明・参加者自己紹介（各回の期待）
研修①　９月30日（火） テーマ：青少年に聞く～居場所はこれだ！～ ゲスト：居場所施設を利用していた若者３人 内　容：若者３人へ質問／グループディスカッション
研修②　10月７日（火）、10日（金） テーマ：さまざまな背景を持つ青少年と関わる人 講　師：石井淳一さん（ことぶき青少年広場） 内　容：実践見学・説明／質疑応答
研修③　10月14日（火） テーマ：青少年と関わる“わたしの役割” ゲスト：松井孝子さん（主任児童委員） 内　容：地域での青少年活動の実践について
ふり返り　10月28日（火） テーマ：地域の大人が子ども・若者にできること 講　師：萩原建次郎先生（駒澤大学教授） 内　容：キーワードからふり返り講義

２　講座から見えてきた支援者の課題

アンケートやヒアリングを通して見えてきたのは、地域や居場所で活動している人にとって情報交換できる場がなかなかないという支援者の課題だ。

同じ職場で働いている仲間がいても“悩み”や“疑問”を感じるポイントが違ったり、他に確認する場がほとんどない人がいる。実際に、参加者の中には、施設の考え方に疑問を持ち続け、解決しないまま過ごし、居場所講座で他の参加者の意見を聞いて初めて解決の糸口を掴んだ人や、「自分の考えややり方でよかったんだ」と思う人、「自分の考えが違っていたのかも…」と発見する人もいた。

そこから見えてきたのは、外部とのつながりが少なく、活動を客観的に見ることが難しいという支援者の現状だ。

そのような状態で活動者や地域の大人たちは、どのような気持ちで活動に従事しているのだろうか？グループ別で話し合っている際に、参加者が語る言葉の中になかなか身近に相談できる場や人がいないことを感じさせるものがいくつもあった。

「“やさしすぎる”と言われたが、自分を偽って厳しくすることが正しいのかわからない」

疑問を感じても心の中の霧が晴れないまま“課題”を持っている人がいるのだと感じた。その他にも次のような感想が寄せられた。

■活動者の心のエネルギーをためる方法はあるのでしょうか。どんどん減っていくのみなのか・・・

■青少年育成者・支援者同士で情報を共有したり、楽しくなれるような“場”って（講師の先生は）お持ちですか？

３　支援者同士が“つながる”効果

講座の参加者が元気になって現場へ戻っていくためには、講師の話を聞くだけでなく、参加者同士でつながることにも意味があると考える。地域をこえた情報共有だけでなく、同じような悩みを抱えている（抱えていた）人が他にもいるということがわかることにも大きな意味がある。同じような悩みを抱えている（抱えていた）人がいることを知るだけで、肩の荷が軽くなった経験のある人は少なくないだろう。

悩みそのものが解決しなくてもいい。ただ、自分と同じように感じる人や同じような事態で悩んでいる人がいることを知ることで、自分や自分の周りだけが特別ではないことを確認できる。これは、参加者の様子、アンケート、講座中のやり取りから気が付いた効果でもある。

「職場で今、やんちゃな子への対応で悩んでいるため、ふり返りの会で『○○センターでやんちゃな子がいる』という話を聞けて自分のところだけじゃないんだという安心感と心強さが生まれた」

回数を重ねることで、参加者同士が“ただ同じ講座で一緒になった人”から“同じ講座に参加している○○さん”へ変わり、次にグループ別の話し合いで一緒になれば“○○なことを考えて活動をしている○○さん”へと変わっていった。

【講座における発見】

講座を進めるなかでいくつかの発見があった。特に印象的だったのは、参加者による相乗効果が生まれたことだ。

講座には想定した対象である初心者から中級者以外にも、経験豊かな人や既に多くのネットワークを持つ人が参加していた。他にも研究者や学生等、立場が異なる人が参加することで、さまざまな視点からの講義の内容を捉えることができ、抽象的だったものが具体的なものとなっていったようだ。

たとえば、「青少年に向き合う」という対応について、経験豊かな人が「反応が薄い子には、あいさつを一言で終わらせないようにしている」など実例を出す。そこに、活動を始めたばかりの人が「なぜ？」と質問を投げかけると経験豊かな人は「どうして、自分はそうしているのだろう」と自身の活動を見直すことになる。これが参加者同士による相乗効果だ。

また、他にも次のような２つの発見があった。

１つは、「安心感と活力の創出」だ。初めての場所に行く時、人は、少なからず緊張をし、そこに知り合いがいることで、安心感が生まれる。“○○センターで会う○○さん”といった顔見知り程度の人が同じ悩みを抱えていることを知ることで、一人ではない安心感が活力につながっていくのである。

もう一つは、青少年への効果だ。相乗効果のところでグループ別の話し合いの際に、「具体例を出し合うことで、理解度が深まる」と述べた。その際に参加者同士のケースカンファレンスへと発展することがあった。講座に参加している１人の活動者の話に対して他のメンバーがアドバイスを行う状況は、青少年を間接的に支援をしていることになると気が付いた。地域の中で青少年を支えるのとは違い、日常的に関わっていない活動者からの支援をその青少年が受けることになる。参加者が話す事は主催者が用意したものではないからこそ、より具体的にアドバイスの一つ一つが本人の中に落とし込まれていく。さまざまなケースを知ることで、そこに参加した活動者たちが地域に帰った時に、青少年に多様な対応できるようになる。

以上が、居場所講座を通して発見できた効果である。

４　今後の育成センターの役割について【“人のつながり”から考える】

育成センターの役割は講座で知り合った人やそのほかの講座で育成センターに足を運んでくれる人を繋いでいくことであり、「人をつなぐ拠点」とが今後ますます求められる。

２年連続で居場所講座に参加した人が、「昨年参加して気持ちが軽くなったものがある」と話してくれた。そして、１回目は講師とのやり取りをきっかけに気持ちが軽くなったが、２回目の今年は、参加者同士のやり取りを通してより前向きな気持ちになれたという。

この参加者の言葉こそ、「人と人をつなぐこと」の意味があらわれていると感じた。

人とつながること（＝ネットワーク）へ魅力を感じれば、ネットワークは人から人へ、口コミで広がっていく。講座から生まれたつながりが、講座を超えて広がり、思いがけないつながりが生まれる可能性もある。

とはいえ、こうしたネットワークの中核を個人で担うことは簡単ではない。ネットワークを構成する団体の形が変わったり、人の異動などにより、ネットワークを維持することが難しくなることもある。

何かをきっかけに生まれたネットワークを維持するためには、常にアンテナを張り、新しい人（団体）や活動の情報を持ち、つながりの中核となる団体が必要となる。育成センターは、こうしたネットワークの中核として、人をつなぐ拠点としての役割を担っていきたいと考えている。

また、育成センターでは、今年度からネットワーク形成の事業として“よこはまユース・ゼミ”を開講した。市内外を問わず、青少年に関わる人々が集まり、少人数でテーマごとに情報共有やゲストの話を聞いては知識を深めている。今年度は、講座参加者を中心に広報しているが、この範囲が参加者の口コミなどで広がっていくことを願っている。そして、そこで集めた情報・人材を発信することもまた、育成センタの一つの役割として今後も取り組んでいきたい。

【参考・参照文献】
１）レイ・オルデンバーグ「The Great Good Plac」MARLOWE &COMPANY New York 1989
２）編著：田中治彦・萩原建次郎「若者の居場所と参画―ユースワークが築く新たな社会―」東洋館出版社2012

次世代へつなぐ地域活動～横浜市立岡村中学校区の活動から～

公益財団法人よこはまユース　総務部　事業課　早川　惟子

はじめに

平成20年９月、それまでの中学生たちの目に余る行動に悩み、苦心する学校や地域の人たちが、自分たちのできることをして、地域を更に住みやすい街にしたいと願い、行政の支援を受け、横浜市立岡村中学校区に『子どもの幸せを実現する会』(以下：実現する会)を立ち上げました。現在は活動も７年目となり、子どもたちも地域に見守ってくれる人がいると感じることができるようになっています。今後、成長した子どもたちがこの経験を通じて、自然な形で地域活動や次の世代の育成に関わっていく可能性を感じる活動です。今回は、よこはまユースの職員として活動に参加させてもらうなかで見えたことをレポートします。

「子どもの幸せを実現する会」発足の経緯

設立当初から、地域組織の代表や役員だけでなく、実現する会の目的に賛同する人なら誰でも参加できるよう、会員資格に柔軟性をもたせました。地域のさまざまな場所への広報紙の配布や自治会町内会への活動状況報告など、連携と協力の呼びかけを行ったことで、地域の幅広い人たちが活動に参加しています。

神﨑会長は、「学校や地域の各種団体と連携し11種類の活動を始めてから徐々に効果が現れ、最近は落ち着いています。しかし活動を弱めることなく、現状にあった活動をするように心がけていきたいです。」と仰ってます。そんな神﨑会長の言葉や地域の方々のお話によって、会員の皆さんが活動への手応えを感じていることが伺えます。平成24年度からは、地域活動支援事業の一環として、行政に代わりよこはまユースが支援という形で関わっています。

また、代表のなり手がなかなか見つからず、当時の磯子区地域元気推進員の阪間さんが、岡村中学校の副校長をされていた時代にＰＴＡ会長だった神﨑さんにお願いして会長を務めて頂いたり、活動資金や事務局的な役割の人材をどう確保するか、区役所の施策にどのように位置付け経済的・人的支援を行なっていくかの検討・調整に、阪間さんのご苦労があったことを伺いました。ちなみに、現在事務局を務める谷知さんも実現する会立ち上げのための会議で阪間さんから議事録作成を頼まれたことをきっかけに、いつのまにか事務局長として活動の中心を担うようになったそうです。

会の活動内容

活動は、主に別表のように11種類の班に分かれて行っています。どの活動も、地域の人が子どもたちとコミュニケーションをとったり、学校の様子がわかるようにと考えられています。

朝のあいさつ運動の様子

実現する会の活動内容は立ち上げの頃から大

茶道教室の様子

きく変化していません。しかし、活動を開始した頃は、地域元気推進員の阪間さんと週５日、朝から夕方まで地域交流室で色々な準備や企画をしていたことを事務局の谷知さんから伺い、さぞご苦労されたのではと思いましたが、ご本人たちは地域の人の協力があったので苦労とは感じなかったと仰います。

現在は、活動を通して地域の人たちの中学生を見る目が変わり、地域全体で子どもたちの成長に目を向け、多様な世代が活動に参加することで地域の人たちが繋がり、気軽に挨拶や会話ができるようになっています。また、中学校だけではなく、夜間のパトロールなど近隣の小学校にも活動を広げています。

活動で心がけていること

このような活動が続いているのは、会長をはじめとする役員や事務局の皆さんの姿勢によるところが大きいと感じます。会長のモットーは、「できる人が、できる時に、できることを！」です。実現する会の立ち上げ時の共通の約束も、続けられるように無理な取り組みはしないこと、そして話し合いは本音を出してということです。また、事務局の谷知さんは「日頃心がけていることは、地域の人に気持ち良く活動に参加してもらうこと」とお話ししてくださいました。よこはまユースの職員として関わる私も、いつのまにか皆さんの魅力に魅せられて、活動に参加するのが楽しみになっています。それではいったい気持ちよく参加してもらうとは、具体的にどういうことなのでしょうか。

実現する会の活動にご一緒させていただいて、役員の皆さんから感じることは、何か特別なことをするのではなく、日頃の活動を丁寧に説明しながら、地域の人たちとの関わりを大切にすることが基本になっているからだと思います。そして会長自らが、実現する会の活動に参加してくれる地域の皆さんに、いつも感謝の気持ちを伝えていることです。例えば、毎週２回の朝のあいさつ運動に参加してくれた方にひとりずつ必ず「いつもありがとうございます。またよろしく」と７年もの間声をかけ続けていらっしゃいます。また、事務局がある学校内の地域交流室には、地域の人がふらりとよって、ご自宅に咲いたお花を持ってきてくださることもあります。そうすると谷知さんがお茶を出して、地域の人はちょっとしたお話をされて帰って行かれます。そういった、活動に参加する人を歓迎する空気が今も関わる地域の人が増えて

大班	小班	班名	活動内容
環境美化班	1	廊下清掃	生徒の様子を見守りながら清掃し、教室の入り口に花を飾る。
	2	外清掃	月１回学校周りを清掃する。
	3	花壇作り	花壇の手入れをし、廊下・トイレに生ける花を育てる。
生徒支援班	4	文化・学習	放課後に文化・生活支援。生徒に応じた学習支援を行う。
	5	お話相手	生徒との信頼関係を築き、話し相手を行う。
報道班	6	えりまねニュース作成	本会のPR用ニュースを発行する。ボランティア募集なども行う。
地域見守り班	7	見守り挨拶	自宅近辺にて、生徒の登下校時において、挨拶・見守り活動を行う。
	8	地域パトロール	地域をパトロールする。他の団体と一緒に行うこともあり。
	9	地域の公園パトロール・清掃	地域の公園パトロールや清掃、花壇の手入れを地元の愛護会とともに行う。
学校見守り班	10	授業参観	月３回、民生委員中心による全クラスの授業参観。
	11	登校挨拶	毎週 火・金 朝８：20～８：45校門に立ち挨拶を行う。

いく要因の一つだと感じています。

実現する会の活動が始まるまでは、学校に地域の人が頻繁に出入りすることはありませんでした。したがって、初めに徹底されたのは、「地域の人に学校に来てもらうこと」だったそうです。月２回実施している折り紙教室は、事前に地域の人の練習会を地域交流室にて行っています。今では地域の様々な行事に引っ張りだこの、地域のコーラスグループ「はっぴぃコール」も、学校に足を運んでもらうための谷知さんの考案でした。

地域や学校の変化

一方、活動に参加する地域の人は、子ども達の変化や地域の人たちとの繋がり、学校との信頼関係に手応えを感じ、地域の一員として地域課題の解決につながる活動を充実させていく力を得ています。

しかし、このような効果的な活動も、実現する会の設立時から全てがスムーズにいった訳ではありませんでした。大切なことだとわかっていても、「どうして地域の課題解決を、ボランティアでしなければいけないんだ。だったら行政にお願いして解決してもらおう。」とか「子どもたちが問題行動を起こすのは学校がしっかり教育していないからだ。」などの声に辛抱強く向き合い、地域を説得し協力体制を整えていったそうです。

部活の合間に茶道教室に参加する生徒

そんなひとつひとつの努力の積み重ねや、実際に地域の人が活動を通して学校に来るようになって、地域の学校に対する感じ方も変わっていったそうです。それは、先生たちの日々の頑張りを目の当たりにしたことが大きかったようです。例えば、担当の授業がない時間も、先生たちは各階の廊下に机を出して仕事をしていました。冬の学校の廊下はとても冷えます。それでも、すぐに生徒の様子がわかるように、コミュニケーションがとれるようにと、先生たちは大半の時間を職員室の外で過ごされていたそうです。そんな姿を見て、地域の人も「学校の先生たちは本当によく頑張っている。私たちもできることをしよう。」と、モチベーションが高まったといいます。朝早くから、あいさつ運動には校長先生、副校長先生をはじめ、毎回10人以上の先生が地域、警察、行政の人と一緒に立っています。そうして双方の信頼関係が強まり、学校の先生も実現する会の活動を頼りにしてくれるようになっていきました。今は放課後の茶道教室にも、授業や部活で忙しい合間をぬって準備や片付け、お点前体験に先生が参加してくれています。

また、今では、学校に地域の人が頻繁に出入りし、授業の見学も実施されていますが、そうなるまでには、実現する会の活動と学校が連携できるよう、校長先生を中心に会の活動について先生方と何度も議論を重ねていったそうです。それと同時に実現する会は、物や費用など学校に出来る限り負担をかけないことを心がけて活動しています。また、何か活動を行う時は、学校に許可をとって行っています。

今後の展望

今後、実現する会の活動の課題として、後継者を作っていくことがあります。どこの地域も、今活動を支えている人の中心は６０代以上の皆さんで、実現する会の役員も例外ではありません。この世代の人たちは、地域活動の原体

験があります。子どもの頃、子ども会や近所のおじさん、おばさんにお世話になった。だから自分もそんな立場で活動するんだと考えやすい世代です。しかし、今の親世代は地域での原体験が乏しく、大切だとわかっていても活動に参加する理由が見つかりにくい世代です。さらに、女性の社会進出が推進され共働きの家庭が増えていく状況下では、平日の昼間や放課後に、子どもたちを見守る目がさらに減っていくことが予想されます。

次世代へつなぐ地域活動にするには

今多くの学校で行われている地域清掃などの「ボランティア」活動は、本来地域活動の一部で、特別なことではありません。しかし、今の若者にとっては、「学校で強制的にやらされた」や「ボランティアは良い子がやる特別なこと」「卒業するのにとりあえず必要だから」などといったイメージを多く持たれています。それは、やはり地域活動が若者にとっての「日常的」なことではなく「イベント的」なものになっているからでしょう。それでは学校を卒業した後にも地域に関わっていこうとする若者はごく少数になってしまいます。そうではなく、自分も地域の人から色んなことをしてもらって成長できたんだと子どもたちが感じることができるようになれば、自然と自分も地域活動に参加するようになるはずです。この実現する会の活動では、イベントの時だけの関わりではなく、日常的にあいさつや声かけが生まれていて、まさにそうした良い循環が生まれる可能性を感じます。こういった活動は「コミュニティサービス」と言ってアメリカなどでは小学生年代からしっかりと教育が行われています。

この横浜市立岡村中学校区のような、「できる人が、できる時に、できること」を無理なく続けていける地域がこれからもっと増えていくように、私たちはできる限りのお手伝いをしていきたいと思います。

子どもの幸せを実現する会　経緯	
昭和58年ごろ	生徒の様々な課題ある行動が多発し、地域では解決すべき課題となっていた。
平成18年	中学校区３連合町内会が課題に取り組む。
平成19年	地元警察、少年相談保護センターの協力を得る。
平成20年７月	横浜市市民局の地域・元気づくりモデル事業認定（子どもの幸せを実現する会）
９月	第１回全体会開催　各自の所属団体や個人で、子どもたちのために、無理せずに長期におよびどのようなことで協力できるかを話し合った。
秋	11のボランティア班誕生。第１交流室に事務局を設置。
12月	「横浜市青少年の地域活動拠点づくり運営団体等審査委員会」において、「磯子区滝頭青少年の地域活動拠点事業」として事業認定
平成21年２月	「磯子区滝頭青少年の地域活動拠点」事業開始
平成25年３月	横浜市の「磯子区滝頭青少年の地域活動拠点事業」は平成24年度をもって終了。
４月	公益財団法人よこはまユースが「地域の青少年の居場所の活動推進・支援事業」として支援を開始。
12月	内閣府「チャイルド・ユースサポート章」受章。

「多文化まちづくり工房」の取組み

公益財団法人よこはまユース　総務部　事業課　吉田　智之

＊執筆協力＊
早川　秀樹氏（多文化まちづくり工房代表）

◆いちょう団地について

横浜市泉区と大和市にまたがるように位置する県営いちょう団地。全79棟、約3,500世帯が暮らす県下でも最大規模の公営住宅地です。

近年、各種メディアで取り上げられる機会が多いその理由の一つは、外国籍住民の集住地域であることによります。入居世帯のうち約20％が外国籍世帯だそうです。

かつて大和市にインドシナ難民のための定住促進センターがありました。センターから近くて入居募集数の多いいちょう団地は、センターを出たインドシナ三国出身者を中心に、外国籍の方たちの集住が進んだと言われています。現在も、ベトナム・カンボジア・ラオスのほか、中国、フィリピン、ペルーなど10か国前後の方たちが暮らしているそうです。

日本語を身につけて仕事や生活が安定した世帯が他の地域へ転居しては若い世帯が新たに入居するというように、外国籍世帯は入居者が循環しています。一方で日本人世帯は高齢化が進んでおり、今でこそ世帯数は多いものの、今後は減少していくことも予想されます。

日本人世帯の減少や高齢化が進行することによって、地域活動は衰退する。各世帯は孤立化し、地域の活力も失われてしまう。また、外国籍世帯の多いこの地域は、地域として孤立化してしまう恐れもあります。

こうした懸念を解消するためにいちょう団地では、自治会を主とした地域住人、市民団体、学校、行政など様々な団体が連携を図りながら多文化共生の地域づくりに取り組んでいます。「多文化まちづくり工房」もその一つです。

◆活動の経緯

「多文化まちづくり工房」は、「多様な文化的背景を持った人たちが、それぞれの個性を出し合い、ともに楽しく暮らせる『まち』をつくること」を活動目的にしています。現在、主に大人を対象とした日本語教室、子どもたちの学習サポート、生活上の相談対応、スポーツを通じた交流の場づくり、遊歩道の管理や防災チームの立ち上げといった地域活動など、多岐にわたる事業活動を行っています。外国籍の方たちを言語や生活面でサポートするに留まらず、その方たちも含めた地域社会づくりに取り組んでいる点に特色があると言えます。しかし、最初からこれらすべての活動を行っていたわけではありません。始まりは日本語教室だったと言います。

1994年、現在「多文化まちづくり工房」代表を務める早川秀樹さんは、知り合いだった中国帰国者の家族十数人が日本に来ると聞き、学生仲間数人と日本語教室を開きました。「特に使命感があったわけではなく、ともにいて楽しい中国籍の彼らと一緒にできることはないかという思いでやっていた」と当時を振り返る早川さん。この時は、団体名にも使われている「まちづくり」という意識はなかったそうです。

教室を続けていたある日、早川さんが一人の学習者にこの教室を利用する理由を尋ねたところ、日本語を勉強したいという他に、次のような答えが返ってきたそうです。

「日本に来たものの、仕事に行けば周りから馬

鹿にされ、こき使われる。そして家に帰れば家族みんな疲れ切っていて、会話もなく寝るだけ。毎日がそんな生活の繰り返しだけれども、ここに来ると自分の話を聞こうとしてくれる人がいてとても救いになっている。生きていることを感じられる。」

早川さんにとって教室に来ることを楽しいと感じてもらえていることは嬉しかったけれども、教室以外の時間、生活の大半を占めるそれらの時間を楽しいと思えていないことに心が痛みました。そして、日本語教室は、日本語を身につけてもらうだけではなく、それによって生活が楽になる・楽しくなるといった、外国籍の方たちの生活に豊かさをもたらすものであるべきだとの思いに至ったそうです。

「生活を送る地域自体に楽しいと感じられる場がなければ、彼ら外国籍の方たちが抱える問題の根本的な解決にはならない。」早川さんはそう考え、地域社会と関わる活動に間口を広げていきました。こうして、2000年から「多文化まちづくり工房」としての活動がスタートしました。

活動当初から続く「日本語教室」

◆活動概要

前述したように、「多文化まちづくり工房」の活動を大きく分けると、日本語教室・子どもたちの学習サポート・生活相談・交流の場づくり・地域活動（まちづくり）になります。

それぞれの活動は、日本語教室での活動を通じて見えてきた課題に合わせるようにして少しずつ派生していったと言います。

学習サポートは、日本語教室に来ていた子どもが高校受験を迎えたことをきっかけに始まりました。当初は受験生向けに行なっていましたが、中学生、小学生と対象を徐々に広げ、今では小学校入学前の子どもたちを対象としたクラスまであるそうです。

若者同士の交流を目的として週末に行っているサッカーも、日本語教室でのちょっとした会話が発端でした。若者と話す中で「休みの日は何をしているの？」と早川さんが尋ねると、「何もしていない」という答えが返ってきました。そこで、学校のグラウンドを借りてサッカーを毎週するようになりました。サッカーに来ることで日本語教室を知った子や生活上の相談を持ちかけるようになった若者もいるなど、他の活動につながる機会にもなっているそうです。

2009年からは、それまで夜に行っていた日本語教室を朝の時間帯にも開くようになりました。来日したものの、10代後半という成長期にありながら子育てに忙しく、就労・就学といった社会との接点を持てずにいる若者が増加している現状を目にしたからです。活動時間が午前中なので、ボランティアも多くが主婦層です。「子育て」という共通の話題で打ち解けやすいことから、学習者にとって安心できる場にもなっています。

交流の場にもなっている「多文化サッカー」

課題に応じた活動ばかりではありません。いくつかの活動は「こんなことしたら面白いかな」という好奇心から始まりました。

ボランティア向けのベトナム語教室は、その一つです。ボランティアは知らない言語を学ぶことの難しさに気づき、外国籍の学習者は自分たちの言語に興味をもってくれたことを嬉しいと感じる。こうして互いへの理解が一歩深まること、単に教える･教わるという関係からフラットな関係に近づくことが「面白い」と感じられた、と早川さん。今はまだないそうですが、いずれは日本語教室の学習者たちがそれぞれ自分の言葉を教える側として関わってくれたらいいな、と早川さんは考えています。

担い手の見つからない団地内遊歩道の管理を自治会から頼まれた時も、「面白いかな」という理由で引き受けたそうです。キャンドルナイトやホタルを鑑賞しながらの夕涼み、ザリガニ釣り大会など、早川さんからは遊歩道を活かした色々なイベントのアイデアが語られました。早川さんにとって、参加した人たちがそれぞれのイベントを楽しむ姿を想像するだけでも「面白い」ことのように思えました。また、イベントをきっかけにして、遊歩道には子どもから高齢者まで地域のだれでもが集まるようになります。集まることによって、それぞれの人たちは年齢や国籍に関わりなく共感できる人がいるということを知り、ちょっとした言葉を交わすようになります。こうして遊歩道が、人々のつながりが少しずつ生まれていく場になることも「面白い」と思えたようです。

一方で、「地域に愛着を持ってもらうにはその土地ならではの風景が必要だ」と常々思っていた早川さんは、遊歩道がその風景になりそうだとも思ったと言います。

いちょう団地では大人になる前に団地を離れる子は多いけれども、他の地域に出た子がかつての自分を振り返る時、無機質さゆえに、ここで育ったと言えるような場が少ない。早川さんは常々、団地で育った子にとっての思い出の風景を残せたらいいなと思っていたそうです。「いちょう団地を、外国籍の子たちにとってのふるさととして、何かあった時には戻ってこられる場にしたい。」と、早川さんは仰います。遊歩道が、彼らが戻ってくる時のランドマークになると「面白い」、そう考えているようです。

◆活動の特色

「多文化まちづくり工房」の活動は多岐にわたりますが、活動にのぞむ姿勢にはいくつか共通点が見られます。

一つは、目の前の課題にしっかりと取り組んでいる点です。「多文化まちづくり工房」として活動を始めたのも、日常生活を楽しくないと感じる人がいるという課題を少しでも改善したいと考えたのがきっかけでした。この姿勢はその後も一貫しています。高校受験という課題が持ち上がったのを機に子どもを対象とした学習サポートを始め、若者が余暇を過ごす場がないと知ってサッカーによる交流活動を始めています。

生活相談を始めたのも、ボランティアへの負担が大きくなったという課題が生じてきたためです。かつては日本語教室の中で相談にも応じていたそうです。しかし続けているうちに、件数も内容もボランティアでは受け止めきれないようになりました。そこで、相談に対応するとともにボランティアが活動しやすい状況を確保するためにと相談用の窓口を別に設けるようになったそうです。

これら課題は、いずれも目の前に困っている人がいる状況に該当します。その意味で、目の前の課題に取り組むとは、目の前の人に向き合ってきたと言い換えることができます。そして、向き合うその目線は相手と同じ高さであり、気持ちに寄り添っているようにみえます。

もう一つは、社会を変えるといったような、使命感から活動しない点です。

前述したように、仲間たちとこれからも楽しく過ごしたいという思いから、早川さんは活動を始めています。その後の活動においても、目の前の

人が困っている状況をなんとかしたいと思うのは、社会に何かを訴えるだとか世の矛盾を正すという意識ではなく、知り合った人(仲間)たちとともに楽しく過ごしたいという純粋な思いからだったように思います。「面白い」と思った活動に取り組むのもそのためではないでしょうか。

これまで数多くのボランティアと関わってきた早川さんは、「使命感や問題意識の高い方は長続きしないことが多かった」と話します。使命感や問題意識の高い人は、自分はこんなこと(こんな良いこと)をしてあげたいという思いが強すぎるあまり、相手に求めるものも大きくなります。その結果、活動が一方的になり、自分の思うような反応が返ってこない場合には相手や活動に不満を抱きやすくなります。

支援する・支援されるという関わりではなく、向き合う相手とフラットな立場で活動できるように、「多文化まちづくり工房」ではあえて使命感を持たないのだと考えます。

◆若者と地域活動

一般的に、若者が地域活動に参加しなくなったということが久しく言われていますが、いちょう団地では若者が地域活動に参加する事例が見られます。

象徴的な事例として、外国籍の若者たちを中心とした防災活動があります。これまで、地域の防災訓練に参加したり、東日本大震災の時には安否確認や避難誘導も行ってきました。

もともとは多言語での防災活動を標榜していたそうですが、日本人世帯の高齢化が進んだ現在は、地域全体の防災活動を担う存在になっています。

この他、ソフトボール・バレーボールといった地域で行われるスポーツ大会やお祭り、地域交流会にも参加しているそうです。

なぜ、いちょう団地では若者が地域活動に参加するのか。「多文化まちづくり工房」が日常的に若者と関わり、互助的なつながりを育んでいることが要因の一つとして考えられます。

中高生世代を考えた時、家庭や学校以外の時間を過ごす場として、日本人であれば塾や習い事、あるいはアルバイトといった場があります。それに比べて外国籍の子は、日本語が壁になって、そういった場に関わる機会をもちにくい状況にあります。

「多文化まちづくり工房」は、日本語教室やスポーツによる交流活動などを通じて、家庭や学校以外の社会と関わる機会のない若者の居場所になっています。そして、日常的な関わりと気持ちに寄り添うような関わり方によって、若者との間に、お互いに「この人たちのためなら」と思えるようなつながりが生まれています。

「多文化まちづくり工房」が若者とのつながりを活かしながら地域社会と若者とを橋渡しすることによって、若者が地域活動に参加していると考えられます。

外国籍や不登校・ひきこもり、障がいのために社会とつながりを持てないでいる若者は、いちょう団地以外の地域にも少なからずいます。

自分たちの生活する地域にもこうした若者がいることを意識し、「多文化まちづくり工房」の事例を、若者と地域社会をつなげる際の一助にしてもらえたらと思います。

若者たちが中心になって行う地域防災活動

[i]1980年２月、大和市南林間に開設。インドシナ難民のための日本語教育、社会生活適応指導、職業の斡旋・紹介、定住後のアフターケアなどの支援を実施。1998年３月に閉所。

「場の力」×ちえのわ・人のわ

神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ施設長　塚原　泉

横浜市の地域子育て支援拠点とは

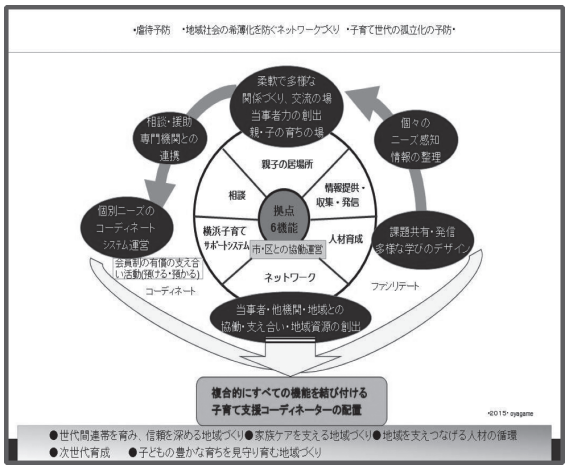
“つながる！ちえのわ♪人のわ♪”を運営の柱に立てて、神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえは、平成19年10月にオープンしました。

地域子育て支援拠点は、未就学の子どもとその保護者、地域の方や支え手を対象とした、区内の子育て支援の拠り所となる施設です。横浜市が18区に１館ずつ設置。その拠点機能として、①親子の居場所（週５日以上、１日６時間以上）としてのひろば開設②相談③情報の収集・発信④ネットワーク⑤人材育成⑥横浜子育てサポートシステム（地域の中で子どもを預けたり・預かったりすることで、人と人との繋がりを広げ、地域ぐるみで子育て支援の輪を広げることを目指す、有償の支え合い活動）の事務局（順次、区社会福祉協議会より事務局機能が移管されています）と、６つの機能を有します。加えて平成27年２月より、子ども・子育て支援法により新たに制度化された「利用者支援事業」のモデル事業を神奈川区が先行実施しています。

横浜市の拠点の大きな特徴は、地域ときめ細かく有機的に繋がる上で、民間の法人と区による協働事業による運営であるという事です。“乳幼児期の子育ち・子育て支援”という切り口から、地域福祉を切り開く役割を担う拠点施設として位置づけられています。

NPO法人親がめが受託

神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえは、運営法人公募による区の選定審査（５年ごとに実施）を経て、NPO法人親がめが２期目も引き続き受託、運営しています。私達“親がめ”は、



拠点機能と展開図

神奈川区の拠点事業受託を目指して設立したNPO法人です。長年に渡り様々な自主・地域活動に関わり続けてきたメンバー達が、ひとつの事業を深める過程の中で繋がり、区内の子育て支援施策を推進する拠点運営に手を挙げました。平成12年にスタートした、神奈川区の“すくすくかめっ子事業”の運営母体「親がめ会議」のメンバーで構成されています。この事業は、“子育て・子育ちを見守るまちづくり、風土づくりのためには、連合町内会を単位とした地域の地縁組織の理解・支援、連携が不可欠”との考えを基にしています。自治会館等を会場に地域の支え手による乳幼児親子を対象とした「親子のたまり場」を、地域と区が協働で区内（平成27年現在43か所）に広めています。16年目を迎えるすくすくかめっ子事業は、神奈川区を支える面のネットワーク機能を育み、地縁で繋がる顔の見える関係は、時に地域課題を解決する機動力を生み出しています。

“地域人”としての立ち位置で

親がめメンバー各々は、神奈川区で子育てをしながら、同時に様々なテーマの地域活動、自治会活動、幼稚園・小、中学校活動等に関わってきました。長年に渡るそれらの活動から、目には見えない大きな社会資本である財産が生まれました。それは地域の中での顔の見える関係から広がる、ネットワークと信頼関係です。一人ひとりが、地域住民として関わるそれぞれの活動の継続は、人と人との繋がりを深め、点と点を線から面へと広げる数々のネットワークへと結びついていきました。

「子育ち・子育て」「町づくり」をテーマとするネットワークの円は、中心点を地域に点在させながら、その面を重ね合せています。幾重にもなったこの“ネットワーク”は、親がめの大きな強みになっています。このネットワークの繋がり先のひとつには、行政である市・区・県があります。

自治会活動・各種助成金活動、横浜市放課後児童健全育成事業であるプレイパーク事業、先の神奈川区すくすくかめっ子事業等を通して、行政各課、また保健師や地域振興課職員、地区センターや地域ケアプラザスタッフ等とのパートナーシップを築いてきました。

テーマ別の地域活動の推進には、行政の公正公明な立場を理解し、広く窓口を広げ誰でもが参加可能なノウハウ・運営が必須です。複数の事業に関わり、時に区職員と共に事業を進める事で、目線を変えて物事を見つめる大切さを学んでいきました。地域子育て支援拠点としての機能を発揮する上で、こうした地域と行政との繋がりは、大きな基盤となり、かなーちえの運営を支えています。「情報の受信・発信基地となり、地域資源に明るく、行政と住民の間の壁や行政の中の多くの仕切りを超えられる知恵と情熱を持ち、何より軽いフットワークを身上とし地域の新しい“絆”を創り出せる新しいタイプの人（月刊社会教育2010年７月号より）」とあるように、市民だからこそ、地域の人だからこその立ち位置で、地域に関わり、グループの相互作用で年々変化していきました。

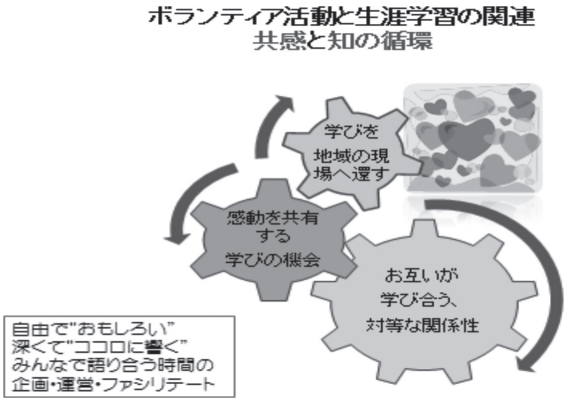
生涯学習がもたらす変化と深化

人間は生涯発達し、生涯を通して学び続けていく生き物です。私達は、地域活動の一場面、一コマから浮かび上がってくる疑問や感動を、常に“学び”に結びつけていきました。次のステップや解決に向けて、講師やネットワークの中からスピーカーゲストを招き、学習会・講演会・ワークショップ（参加型学習）等を重ねて開催しました。一人ひとりの思いを引き出し、思いがけない着地点に到達する、すぐれたファシリテーターによるワークショップから、その手法を吸収しました。それらを、各定例会に活かし“語り合いの場づくり”へと深めていきました。また、市内各所で開催される講座情報をリサーチして、メンバー各々が貪欲に参加、フィードバックし、学びを共有していきました。この数々の学び体験は、“学びを得て、個人、グループが変化・深化する実感の蓄積”と“社会へ働きかけていく事への思いや情熱を燃やし続ける原動力”となって、ネットワークと両輪で、かなーちえ運営の骨格となっています。

ボランティア活動の実践の場と生涯学習との関係を「知の循環型社会の構築」（2008年中央教育審議会より・地域福祉援助をつかむ・岩間伸之・原田正樹著・2012年有斐閣）と位置付け、これからの地域福祉社会になくてはならない視点であるとしています。

本音で語り合える関係づくり

拠点は「地域力の創出」という目指すべき姿があります。人と人が心を開放し、本音で語り合える関係を育む場・機会を地域と共に多様に生み出し、助け合い、支え合う繋がりを創り出す



壮大な目標です。地域社会の崩壊・数々の青少年の問題・2030年問題等を念頭に、乳幼児期の親子が、多世代、多くの人垣の中で、それぞれの個性や価値観にふれながら、自らが育ち変容していく時間、契機をちりばめる、そのために、**①ちえのわタイム**（地域グループ、子育て中の人、施設スタッフ、NPO 、企業等の力を借りて、親子に楽しい機会の提供）**②仲間トーク**（当事者達による、語り合い、わかち合いの時間。双子三つ子・国際交流・療育おやこ・シングル親・仕事と子育て・アラウウンド20歳、40歳・等）**③みんなでトーク**（テーマにそってフリートーク・カウンセラーによるみんなでトーク）**④妊娠期、産後ケアのグループワーク⑤出前かなーちえ**（プレイパーク３か所、公園等での情報提供、相談）以上毎月開催**⑥学びの機会**（大型講演会・ワークショップ・講座）**⑦地域ケアプラザ、地区センターとの共催事業⑧大型イベント**（年３回）**⑨地域支え手・関係機関対象ネットワーク交流会**（年４回）以上定期開催を基本にしています。つなげる・つながるをキーワードに進めるこれらの事業は複雑に絡み合い、相乗効果を生みだします。

（その他はかなーちえで検索）火曜～土曜９：30～15:30の開館中、約290㎡のひろば、交流コーナーは、いつも地域の支援者が訪れ、ゴザを敷いたスペースでは何人かが膝を突き合わせて語り合う姿があり、子ども達は泣き、笑い、遊び、飲食OKスペースでは“食”をはさんだ交流があり、地域ボラ、学生ボラが風を通すといった、“何でもあり”の空間です。“自由な空気感”がそこにいる人達から自然ににじみ出ている場が創られています。黒子のように、伸縮自在に人と人を繋ぐ役割のスッタフ（１日に６人配置）は、各事業後の感想や意見を引き出し人とすり合わせる種を蒔いていきます。「おたがい様で迷惑かけあって、みんなの子どもをみんなで育て合おう」というモットーを、地域のそこ此処に広げ、根深い問題に突き当たる思春期の子育ち・子育てを支え合う、関係を育む体験の場づくりをしています。

「場の力」は掛け算で広がっていく

日々、人が集う自由な場には、力が宿ります。その日その日がライブであり、ドラマが生まれ語られる言葉は、掛け算になって自分や場に還ってきます。そんな「場の力」は、地域の課題を解決する小さいけれども濃い１歩を進めてくれます。かなーちえが大切にしている事業のひとつ、当事者による語り合いタイム“仲間トーク”は、まるで生き物のように枝葉を伸ばし一歩を後押ししてくれます。ここでは、同じビル内にある“東部療育センター”に通所する、障がいをもつ子どもの親達が立ち上げた「療育おやこトーク」の事例を紹介します。それは、わが子の発達の過程に不安を抱き揺れ動く親の気持ちを経験者である先輩親達が受け止め、体験からの助言や情報、少し先の見通し、専門の先生に支えられる心強さ等を語り合う時間です。当事者の専門性を存分に発揮、私達に多くの学びを与えてくれます。その毎月のトークで必ず行きつく「発達に個性がある子ども達の、学齢期・青年期の居場所がない」という問題がありました。「自分達で…と思うけれど目の前の子育てでいっぱいで余力がない」という当然の声です。そこで、「療育おやこネットワークタイム」開催を提案。地域ケアプラザ・地域活動ホーム・区

社協・地域グループ・NPO・学童保育クラブ・フリースクールのスタッフ・企業に個別に声をかけ、当事者の声を聴く会に集まってもらいました。無理のないペースで回を重ね、時に放課後児童デイを運営するNPOスタッフや、地域や小学校の授業等で、共生の啓発活動を展開している当事者グループの代表をゲストスピーカーに招き、皆で学び同じ時間を共有していきました。その中から、地域ケアプラザエリア（２か所）のネットワークが開かれ、ケアプラザの自主事業が生まれました。また当事者達からも発達の個性ごとに２グループが立ち上がり、ケアプラザの後援を受けて月１回の定期開催の場が２つ誕生しました。あわせて、小・中学校の子ども達を対象とした啓発メニュー、伝える技術を皆で学び作り上げていく、新たな動きもスタートしました。次年度一年かけてゆっくり、じっくり進めていく事を確認しています。こうした話し合いは、オープンスペースで乳幼児親子が過ごす、すぐ横で行っています。担当外スタッフは、主旨をさり気なく世間話の延長で周りに伝え、地域や社会に働きかえていく種として、目の前にある事を言語化していきます。各機関のスタッフ同士も、共通する課題テーマを選び、同じ事業を進める事で、スキルや学びを共有し、互いの立ち位置や情報を交換でき、コミュニケーションを深めます。何より、深く心に響く時間のデザインが、人と人を繋げていく接着剤になり、人が動くという経験が刻まれていきます。こうして、ひとつの仲間トークから、地域のコーディネーターが現場で繋がり、当事者の力が加わった相方向の生きたネットワークの場が育っていきました。

人材の循環

かなーちえは「子育てのその長い道のりに、まちの中に、いろんな人による、いろんな給水所をいっぱい増やそう」と掲げ、地域の中の様々な”場“と関わり、また新たな”場づくり“に向けて地域の人と共に、区と協働で歩んできました。16年目を迎える神奈川区すくすくかめっ子事業親子のたまり場では、かつての利用者だった親達が、子育てが一段落し次はわが町の支え手として還ってきてくれるという、嬉しい人材の循環が起こっています。支え手世代の層に厚みが増しました。居心地のいい場で、人が人に寄せる親身な思いは、世代を超えて伝播していくのです。中学生と親子のふれあい授業に中学校に出向くと、大きくなった子ども達に迎えられます。少し照れた挨拶に、胸が熱くなります。この喜びが地域活動の醍醐味です。

私が地域活動として関わる「白幡の森プレイパーク（16年目）」でも、運営を支える世話人の３分の２は20代・30代の子育て真っ最中の人達になりました。10代下の世代に、次から次へと小さなバトン（誰にでもできる簡単な役割）を細かく丁寧に渡し続けるリレーです。

高齢化社会の日本において、地域を支える人材不足が課題となっています。人材を引き継ぎ、活動を継続していくためには、長いスパンでのコミュニケーションと、活動の仕事内容を細分化し、具体的でわかりやすい役割（お茶を買ってきてねなど）を、ビリヤード方式でピンポイントで、頼んでいく事が有効です。そしていつも楽しそうなムードと、失敗しても大丈夫！な大らかな気風も欠かせません。若い世代からエネルギーを注入してもらいながら、“地域力の大切さ”と、“ケガと弁当は自分もち”というボランティア活動を支えるエッセンスをしっかり伝えていく事も忘れてはならないでしょう。

視点をずらす、360度の切り口

現場の声を聴いて、ニーズの共通項を見出し、多方面からサポートする中間支援組織的な役割を担う機関の繋がりは、分野を超えた新たな視点をいつも与えてくれます。この“視点をずら

す”という点から「フューチャーセンター」という、企業、自治体、NPOが注目する新しい変革の方法論があります。「様々な関係者を幅広く集め、対話を通じて新たなアイディアや問題の解決手段を見つけ出し、相互協力の下で実践するために設けられる施設～多様なメンバーが集まる場をつくり、集合知を形成し、新たな知を創造しようとする取り組み」（ウィキペデイアより）

社会善を中心テーマにして、今までの繋がりをさらに発展させた“対話の場づくり”は、それぞれの切り口から360度の風景を見せてくれるかもしれません。異業種との繋がりは、ハッとするような気づきや、繋がり得なかった点と点の結び目を創ってくれることでしょう。日本福祉大学・穂坂光彦氏は、「福祉社会開発の支援ワーク･2011/3/13」（ウエブページより）で、“ひとりひとりに自由なストーリーを支える「場」を地域の中に設定する。その中で関わり方のスタイルも変わっていく、交流的社会空間”、“新しい自分を発見し、次々と脱皮していける人”と“学びほぐし”（学んで身につけたものを、今度は取り外していく）の意義を説いています。

乳幼児期から青年期の子どもの育ちに何が大切なのかを常に問い続け、人がつながる・人がひろがる地域づくりのために、アメーバーのように柔らかく、軸にはアンテナをピンと立てたコーディネートチームの輪があります。その輪が、目の前の道に空く穴を埋め、後に続く世代へ皆で繋いでいけると信じています。

青少年育成の「中間支援組織」が担う役割

神奈川大学・東京学芸大学講師　久田　邦明

はじめに

中間支援組織とは、行政や企業と住民団体（市民団体）のあいだに位置して両者を結び付ける役割や、住民団体（市民団体）や個人を互いに結び付ける役割を担う組織のことである。狭義の意味では、住民団体（市民団体）のあいだに立って両者を結び付ける組織のことをいう。

中間支援組織には、まちづくり、国際協力、地域福祉、自然環境保護などさまざまな目的のものがあるが、わたしの関心は青少年育成の中間支援組織である（青少年育成は、若者支援などを含む広い意味で使う）。よこはまユースも、その一つに数えられる。そこで以下では、青少年育成の中間支援組織の役割について考えることにする。

叙述の順序は以下のとおりである。第一に、中間支援組織に期待される役割について確認する。第二に、本報告書を発行する、よこはまユースの中間支援機能について検討する。第三に、1960年代半ばから社団法人青少年国民会議（1966～2009年）によって組織化がすすめられた、旧いタイプの中間支援組織である青少年育成県民会議、青少年育成市町村民会議を取り上げて、中間支援組織の全国的動向について検討する。

中間支援組織に期待される役割

まず最初に、青少年育成の中間支援組織に期待される役割を確認しておきたい。

第一に、行政や企業と住民団体（市民団体）を結び付けるという役割である。行政や企業には、資金、人材、情報などの提供が期待される。住民団体（市民団体）には、行政や企業の手に余る公共的な性格の事業を引き受けることが期待される。両者のあいだの関係が意識されなかったり、資金などを提供する行政や企業の都合に左右されてしまったりすることがあるが、そのような問題を調整して解決するのが中間支援組織の役割である。

第二に、地縁団体の住民団体と目的団体の市民団体の協働をすすめるという役割である。子ども会やスポーツ少年団などの住民団体は、地縁にもとづいて活動する。これに対して、ひきこもり支援や子どもの貧困救済の市民団体は、ミッション（使命、目的）にもとづいて活動する。両者がそれぞれの長所を生かし短所を補い、協力するのを促すのが、中間支援組織の役割である。

第三に、行政施策などの青少年育成の今後の方向を提案するという役割である。行政施策はそのときどきの都合ですすめられがちだけれども、子どもや若者を育てる施策や活動は、10年、20年の長い尺度で考えられなければならない。中間支援組織は、行政とはちがって、青少年施策の動向を長期的な視点で捉えて、今後の方向を提案していくことができる。また、企業や青少年育成団体、さらには青少年のことを気にかけて面倒を見る個人に向けて、青少年育成の今後の方向を提案するという役割も期待される。

よこはまユースの役割

よこはまユースは、実に広い範囲にわたって数多くの中間支援機能を担っている。それをすべてカバーするのは手に余る。ここでは、本報

告書で紹介される、放課後キッズクラブ、居場所づくり講座、大交流会などの事業がおこなわれていることを指摘しておいて、話を先にすすめる。

「第一回　横浜子ども・青少年に関わる活動関係者の大交流会」は、今年度初めておこなわれた、他に例のない、特筆される事業である。詳しい内容は報告文に譲るとして、注目されるのは、教育、福祉、労働、地域振興、国際交流など多くの分野の人びとが集まったことである。また、行政職員や行政関連施設スタッフと、住民活動（市民活動）の人びとが一堂に会したことも、これと同じく注目される点だろう。長期間にわたって活動を続ける人と、最近活動を始めたばかりの人が親しく語り合う姿もみられた。この集まりから今後、時代を先取りする活動がその姿をあらわすようになることも期待される。このような幾つかの点で、この事業は、中間支援組織にふさわしいものといえるだろう。

これと並んで、「青少年の居場所づくり全国フォーラム」も、中間支援組織の事業として特筆されるべきものである。わたしもずっとかかわりがあったので紹介を躊躇しないでもないが、やはりこの機会にあらためて確認しておきたいと思う。この事業は10回を数える。始まったころを振り返ると、当時は、文部科学省をはじめとする行政や市民団体によって各所で「居場所づくり」をテーマとする交流や研修の事業がおこなわれていた。それが今日では全国的にみても珍しい事業となっている。そのためだろう、関連事業を担当する行政職員が遠方からも訪れる。行政施策には流行りすたりがあるが、そのようななかで10年にわたって継続されてきた意味は大きい。

もう一つ、昨年から始められた「よこはまユース・ゼミ」を挙げたい。この事業は次のような趣旨（呼びかけ文）で、おこなわれている。「青少年をめぐるさまざまなことについて、ちょっと知りたい・学びたい、そして話したい。／そんな皆さんたちとともに、ヒントを得たり学ぶことができるゼミを開講します。／毎回、テーマをもとに、参加したみなさんと意見交換しながらすすめていきます。もちろん、『聞くだけ』でもＯＫです！　青少年に関わる活動や施設の方、学生、社会人、保護者の方…関心のある方ならどなたでも参加できます。／横浜の、そして未来の青少年のことを一緒に考えていきましょう。」毎回のテーマは以下のとおりである。「ワタシのこと、こうなんだけど、どう思う？（11月）」「若者自立支援と施策のゆくえ（12月）」「“青少年健全育成活動”のいま～子ども会活動を通じて～（1月）」「外国につながる子どもたち／学習言語／生活言語／学習支援etc（2月）」。毎回、横浜市内で活動する人を報告者に招き、十数人の参加者が話し合うという方法をとっており、よこはまユースの若手職員の研修の機会にもなっている。前述の大交流会や全国フォーラムとはちがい、少人数でじっくりと語り合うというプログラムを継続的におこなっている点が注目される。

10回目を迎えた「青少年の居場所づくり　全国フォーラム2015」。全国から100人を超える参加があった。

続いて、よこはまユースの中間支援組織としての役割をより一層充実させるための提案を幾つか記しておきたい。第一に、情報発信媒体の

充実である。ホームページには「馬車道通信」「スタッフブログ」「情報スポット」などの、親しみやすかったり役に立ったりする記事も掲載されているものの、全体としてみると、団体の事業報告の枠を超えて人びとと交流する、開かれたメディアになっているとはいえない(例として、神奈川県による、ひきこもり若者支援サイト「ひき☆スタ」を挙げておく)。第二に、青少年育成の今後の方向についての提案である。まず、横浜市の行政施策の動向をみた現実的な提案が考えられる。これは主に青少年関連部局を想定したものだが、それ以外にも、福祉、保健、労働などの部局も視野に入れる必要があるだろう。もう一つは、企業や青少年育成団体、個人などを対象とした、青少年育成の今後の方向についての提案である。なお、毎年刊行される本報告書は、このような提案を想定したものとみることもできる。第三に、中間支援組織としての市民団体とつながることである。神奈川子ども未来ファンド、インクルージョンネットよこはま、横浜コミュニティデザイン・ラボなどの団体は、よこはまユースと同じように中間支援機能を担っている。これらの市民団体との協働の途があるのではないだろうか。

「よこはまユース・ゼミ」。活動領域や立場を超えた参加者が集まっている。

青少年育成県民会議、市町村民会議の現状

次に、青少年育成の旧いタイプの中間支援組織を取り上げて、全国動向をみておきたい。

青少年育成の中間支援組織として長い歴史をもつのは、1960年代後半から青少年育成国民会議によって全国的に組織がすすめられた、青少年育成県民会議と青少年育成市町村民会議である。これは、法人あるいは任意団体の組織形態だが、財源、人材、事務所などを行政に頼っている。行政と密着しているために行政の意向に左右されるが、そうはいっても、会員には、青少年育成団体はもちろんのこと、外郭団体、住民団体、学校関係団体、企業、個人などの広い範囲にわたる地域の関係者が名を連ねている。この点は見逃せない。

一般に、県民会議や市町村民会議は中間支援組織とは呼ばれていない。その理由は、余りにも行政とのあいだの距離が近いために、2000年代から注目されるようになった中間支援組織とは性格が異なるとみられているからだろう。じっさい、これまでは主に、国の外郭団体である青少年育成国民会議の事業をおこなってきた。そのせいで、青少年国民会議の活動停止に戸惑うことになったという経緯もある。最近、県民会議の連絡組織が新たに組織されつつあるものの、困難な問題が多いようにみうけられる。それでも、わたしは、このような現状を否定的に捉えてはいない(楽観はしていないが)。従来の県民会議、市町村民会議は、“地域の子どもは地域で育てる”といったタテマエとはちがって、上意下達の傾向があったが、この間の環境の変化を、横につながるネットワーク型の組織へと脱皮する好機とみることもできるからである。

じっさい、青少年育成千葉県民会議のように、市町村民会議の設立や活性化のために事務局スタッフが県内をこまめに回ったり、県庁の所管部局との関係を密なものにしたりするという具合に、これまで形式的になりがちだった役割を、

一つひとつ着実に手を打って追求するところがある。また、岩手県青少年育成県民会議のように、行政の関連部局をつないだり、新しいタイプの団体（市民団体）との連携をすすめたりするところがある。さらには、青少年育成鳥取県民会議のように、県民会議の連絡組織づくりに積極的なところもある。また、そのほかにも、県民会議の抱える問題について事務局が的確に把握し、どうすべきかを検討するところもある。

子ども・若者育成支援推進法において計画された、「地域における子ども・若者育成支援ネットワーク」の核となることが期待される「子ども・若者支援地域協議会」の設置数はきわめて少ない。その理由の一つは、県民会議や市町村民会議のような既存の資源を視野に入れないままに、上からかぶせるようなかたちで計画されたことにあるのではないだろうか。この点からも、県民会議や市町村民会議に目を向けて、中間支援組織への再編成をすすめていく必要があるだろう。

おわりに

わたしは神奈川県青少年協会の理事の立場で協会の存続策のレポートをまとめたことがあるが、理事を辞して数年後に、協会は解散してしまった。そのとき自分の状況認識が甘かったことを反省した。ただ、僭越なことを承知でいわせてもらえば、わたしなどとはちがって長期間にわたって協会と深いかかわりをもってきた関係者が、その熱意は疑えないとしても、協会を取り巻く状況を楽観的にみていたという問題があると思う。わたしは状況が切羽詰った段階で、個人的な提案として、当時注目を集めるようになっていた“民間学童”のような独自の収益事業を提案したけれども、旧い体制の難しさを知らない者の無理なアイデアだったようだ。

青少年育成の中間支援組織の継続はなかなか難しい。それこそ団体の役員や職員が、知恵のかぎりを振り絞って、その可能性について考えるしかないのだろう。

第２部　事業報告

野島青少年研修センターにおける地域の人材とのつながり
富岡　克之
つながりが、新たなつながりを生んだ第１回「横浜 子ども・青少年に関わる活動関係者の大交流会」
阿久津　強
ユースワークの「評価」を考える－３都市相互評価会議から－
七澤　淳子

野島青少年研修センターにおける地域の人材とのつながり

公益財団法人よこはまユース　横浜市野島青少年研修センター　富岡　克之

体験活動の推進

“コミュニケーション能力の不足”“自己肯定感の低下”“モラルの低下やマナーの乱れ”などのフレーズは、近年の青少年課題のキーワードとして取り上げられることが多い。その背景には、社会全体の情報化や都市化が進み、テレビやインターネットなどのメディアから多くの情報や知識を得るといった間接体験が広がる一方で、青少年が人や自然・社会といった実体のあるものと実際に関わる直接体験の機会が減っていることが、その大きな要因のひとつだと考えられている。

イカダ作り体験

横浜市野島青少年研修センター（以下、研修センター）では、こうした課題に対応すべく、青少年の「直接体験機会の提供」に重点をおいた事業に多く取り組んでいる。

これまで研修センターでは、天候に左右されず室内でさまざまな体験活動を実施することができる全天候型の施設特性を活かした室内研修（調理実習や工作、グループワーク等）を中心にプログラムを提供してきたが、宿泊体験学習で利用する学校からの要望もあり、特に平成25年度以降、研修センターの目の前に広がる「横浜唯一の自然海浜」である野島の海辺を活用した自然体験プログラムの充実に力を入れている。

研修センターの自然体験プログラム

研修センターの自然体験プログラムの一端を紹介すると、

・干潟の生き物観察会（磯遊び）
・カニ釣り大会
・タッチプール（海の生物とのふれあい）
・野島海岸の歴史探索
・カニの仕掛け作りとカニ漁体験
・カヌー体験
・イカダ作り体験
・化石探検とレプリカ作り
・探検フォトラリー
・海苔作り体験
・バードウォッチング（海鳥編）
・ハゼ釣り体験
・星空観察ナイトツアー

上記のように、野島周辺の自然環境を生かした多彩なプログラムを提供している。室内での生活体験や社会体験を主としながらも、身近な自然に触れ合い、直接体験の機会を提供することができる研修センターならではプログラムとして、学校や利用団体にも徐々に定着しつつある。

地域の協力の重要性

こうしたプログラムをより多くの青少年に体験してもらうために欠かすことができないのが、地域からの協力であり、野島の自然をフィールドに活動している地域団体や市民団体とのつながりである。

海の生物を解説する「海をつくる会」の坂本さん

ご協力をいただいている団体の一部を紹介すると、

①海をつくる会（アマモの再生活動や海の清掃活動をしている市民団体）

②のじま自然観察探見隊（子ども達に身近な自然を伝える市民団体）

③自然体験教育研究会ＮＥＥＳ（ＮＨＫ モリゾー・キッコロ森へ行こうよ！に出演中の山田陽治氏）

④カヌークラブ（総合型地域スポーツクラブ 金沢スポーツクラブ）

⑤早川丸（地元漁師の早川氏）

⑥学校レクセミナーＹＳＲＳ（教員を中心としたレクリエーション研究グループ）

⑦ＮＰＯ体験学習研究会（体験学習の調査、研究、開発、普及、活性化を図る団体）

⑧関東学院大学学生支援室（学生のボランティア活動や地域貢献活動を支援）

など、様々な分野の知識や技術をもつ地域の団体や個人の方が、研修センターの自然体験プログラムの実施に協力してくれている。野島の自然を最大限に活用したプログラムを展開する上で、こうした野島の自然環境や地理、地域のネットワークをよく知る団体等の協力は必要不可欠である。

専門的なスキルや知識を持った人材の確保、用具等の充実、フィールドの確保、安全管理に対する対応など、充実した自然体験プログラムを安定的に実施するために配慮するべきことは多い。特に、活動の安全面を左右する専門的なスキルや知識については、豊富な経験の蓄積をもつ団体との連携によって、より安心で安全なプログラムを提供することができている。

また、プログラムに参加する青少年にとっては、こうした自然体験の“プロ”との出会いを通して、本物の技術、知識、そして多様な「大人」に触れる機会となっており、自然体験を通した「学び」もより深く、広がりをもったものになっている。

地元カヌークラブによるカヌー指導

地域の理解と協力

このような自然体験プログラムの提供を含め、研修センターの運営は、施設が立地する「野島」という地域とその環境を長年にわたって守り育ててきた、野島町内会や金沢漁港など地域の人々の深い理解と協力なくしては成り立たない。

研修センターでは、夏祭りや陶芸教室、避難訓練など、野島で行われる地域行事にセンター職員が参加させてもらう一方で、敬老会や地域サークル活動の活動場所としてセンターの一部

を提供するなど、地域住民との「顔の見える関係づくり」に取り組んでいる。

また、カヌー体験やイカダ作り体験のように海上に出て行うプログラムの際には、金沢漁港に事前に相談することで、漁船や釣り船の航路や出港・帰港時間をもとに活動時間を調整するなど、海上での事故防止に努めている。さらに、協力団体と共に地元の野島海岸の清掃活動を行うことで、地域の方々の研修センターの活動に対する理解を深めていけるよう努めている。

野島町内会の夏祭りで神輿に参加する職員

繋がりの大切さ

昭和53年に旧・研修センターが設置されてから現在までの37年間、歴代のセンター職員は地域や協力団体との関係性を少しずつ築き上げてきた。施設運営やプログラム提供への協力をお願いするだけでなく、センター職員も地域行事に参加するなど日々の関わりを積み重ねることで、研修センター職員という以上に、職員ひとりひとりが「地域の一員」として、地域とのつながりを大切にしてきた。そして、こうした積み重ねの上に、いまの研修センターが成り立っているのである。

多様な体験機会の提供を通して青少年の育成に取り組む研修センターの周りには、その活動を様々な立場から支え、応援してくれる地域の人々がいる。こうした地域の人々に支えられて、野島青少年研修センターは日々全力で青少年に向き合うことができている。

地域の関係性が希薄化している昨今、研修センターは、これまで以上に地域との「つながり」を大切にして、地域の方々と共に青少年が多様な出会いや体験ができる環境を育んでいきたいと考えている。

研修センターとそこを利用する青少年、そして、力を貸してくれる地域の大人たち。野島青少年研修センターでは、こうした人とのつながりの中で、青少年を育み、人とのつながりの大切さ、体験することの喜びをより多くの青少年に伝えていきたい。

魚に直接触らせてくれる漁師の早川さん

つながりが、新たなつながりを生んだ
第１回『横浜　子ども・青少年に関わる活動関係者の大交流会』

公益財団法人よこはまユース　横浜市青少年交流センター　阿久津　強

年明け間もない１月12日（祝）、横浜市青少年交流センター（以下「交流センター」）を会場に、よこはまユース共催事業　第１回『横浜　子ども・青少年に関わる活動関係者の大交流会（以下「大交流会」）』を開催しました。

この大交流会は、市内の子ども・青少年支援の基盤となるネットワークの構築を目的に、横浜市内で子ども・青少年に関わる活動をしている団体・個人が、お互いの活動について知り合い、対話を深める会です。

子ども・青少年に関わる方で、自分の活動に限界を感じたり、新たな取り組みをしたいと思う時に、現状では足りない情報やノウハウを補えるよう、他の団体とつながりを持ちたいと思われたことのある方は多いのではないでしょうか。異分野とのつながりを欲しつつも中々つながりを持つことが出来ずにいるという話を耳にします。

横浜市内には、教育・福祉に限らず多種多様な分野で、子ども青少年と関わっている個人・団体の方達が沢山います。そのなかで、カテゴリーの近い分野同士で情報交換や交流をする機会はあるものの、異なる分野同士の交流の機会はこれまでありそうでなかったのが現状です。

「分野を問わず、子ども・青少年に関わる活動をしている人達とつながりを持ちたい」という声が、交流センターで毎年開催している「青少年の居場所・地域活動拠点連絡会」の参加者の方達からも出てきました。

そこから端を発し、大交流会を開催するために、「青少年の居場所・地域活動拠点連絡会」に参加した方達が中心になり、『“横浜　子ども・青少年に関わる活動関係者の大交流会”を開く会（以下「開く会」）』を発足しました。開く会のメンバーは、自主的に集まった子ども・青少年に関わる施設や団体の施設長や職員など12人の人達です。

開く会のメンバーは多忙な人達ばかり。日常業務の傍ら準備をすすめていきました。最終打合せは日常業務への影響がないよう、まだ世の中ではお正月気分が抜けていない１月５日に行いました。広報活動はもちろんのこと、チラシのデザイン、フェイスブックの立ち上げ、冊子や名簿の作成、会場設営、当日の司会・受付・機器の操作まで、開く会のメンバーが全員で分担して行いました。

前夜に行った冊子の折り込み作業では「最近はこういう作業をする機会がないので、久しぶりです。」と言いながら、昔取った杵柄で慣れた手つきを見せてくれた施設長もいました。

経費が限られていたため、広報は開く会のメンバー一人ひとりの持っている人脈を活用し、口コミ中心に行いました。参加いただいた方の多くは、口コミによってこの大交流会を知ったそうです。

開く会では、大交流会の時にいかに参加者同士が交流しやすい環境を提供できるか、に重点をおいて案を出し合いました。話し合いの結果、講演会やパネルディスカッションのようにゲストが情報を一方向で発信するのではなく、あくまでも参加者が自由に交流する時間を主にし、交流をしやすくするための材料として「参加者による活動紹介タイム」を前段に持ってくるという構成にしました。

当日は参加いただいた個人・団体は、青少年の地域活動拠点、ユースプラザ、地区センター、プレイパーク、学童保育、保育園、障害児入所施設、シェルター、コミュニティハウス、居場所づくり活動、不登校引き込もり支援、寄り添い型支援、学習支援、就労支援、国際交流、指導者育成、農業自然体験、性的マイノリティ支援、研究者、大学生など、様々な分野で子ども・青少年に関わっている89人の方達です。

第１部の「参加者による活動紹介タイム」には22団体が参加しました。発表時間は、なんと４分間。発表者は短い制限時間のなかでパワーポイント等を駆使し、各団体の子ども・青少年へのかかわり方や事業や運営における取り組みについて熱心に語りました。傍聴者も聞きこぼしがないよう、真剣に耳を傾けていました。

第２部の「交流タイム」では、第１部での発表をきっかけに、参加者の皆さんが積極的に情報共有を行いました。

話をしたい人がどこにいるか見つからなかったり、なかなか交流の輪に入れない参加者の方には、開く会のメンバーが声をかけ、他の参加者への橋渡しをしていました。

会場では、同業種同士で近況を報告しあい課題を共有する人たち、自分達が新たに取り組んでみたい活動をすでに実践している人達からアドバイスをもらう人達、大学の研究者から助言を受ける人たちなど、様々な交流の様子が見ら

れました。ゆるりとしたアットホームの雰囲気ながらも、参加者の熱意ある真剣さがひしひしと伝わってきました。

参加された方から、「会いたいと思っていた団体とつながりができて良かった。」「普段会えない人達の活動を知ることができ、有意義な時間でした。」「沢山の話を聞くことができたので、今後の活動に活かしていきたい。」という感想をいただきました。新しい情報を知ったり、他団体と顔の見える関係ができたことで、今後いっそう充実した青少年とのかかわりができるのではないでしょうか。

また、「市内には仲間がたくさんいるんだ！と感じ、心強かったです。」「皆さん熱心で、パワーをもらいました。」という意見もいただきました。青少年活動には責任感や使命感がつきもの。頑張るゆえに力が入り、息切れしてしまうこともあるはず。そんな方達が、他の活動している人達と出会ったことで、元気をつける機会にもなったようです。

第１回の交流会が終了したばかりですが、開く会は第２回交流会に向けて動き始めています。今回の参加者の中から、あらたに開く会の仲間になってくれる人達も出てきており、開く会の活動を通しても人と人とのつながりが広がっています。

【報告】ユースワークの「評価」を考える－３都市相互評価会議から

公益財団法人よこはまユース　横浜市青少年育成センター　七澤　淳子

はじめに

「青少年の成長を支援する」――。私たちが普段何気なく使っている、この言葉をもう少し丁寧に考えてみたい。「成長」「支援」とは具体的に何を指すのだろうか。そして誰が、何をもってはかることができるのだろうか。

ユースワークは、その取り組みのみならず評価することが非常に難しいとされている。職員と青少年とのその時々で変化する“関わり”は、手法も成果も標準化しがたいがゆえに言語化・数値化も困難だ。

近年、多くの青少年施設に指定管理者制度が導入され、成果をより分かりやすく説明することが求めらるようになった。評価の重要性はますます高まっている一方、適切な評価指標については未だ確立されているとは言えない。こうした状況を踏まえ、今回「子ども・若者支援専門職養成研究所」[(1)]（以下、「子若研」と言う。）の調査の一環として、３つの青少年関係団体が相互事業評価を行った。本項では、調査の途上で見えてきたユースワークの評価のあり方を中心に、成果や課題について報告したい。

３団体相互評価会議の概要

調査には、子若研とよこはまユースの他、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会、公益財団法人京都市ユースサービス協会が参加した。これらの財団は設置趣旨や都市の規模、青少年の「居場所づくり」に取り組むなど事業内容も類似しており、評価視点の違いや共通性について比較検討がしやすい。各施設を訪れ、共通フォーマットを用いて実践を評価し、視点の違いやより良い指標について検討した他、職員の処遇や研修体制等について記入されたシートをもとに、ユースワークに関わる職員に必要とされる専門性や養成方法についても意見交換を行った。

よこはまユースにおける事業評価

よこはまユースにおける事業評価は、次の手順で行う。まず､事業ごとに成果（目標）を定め、その成果をはかる指標（できるだけ数値化・定量化する）とその根拠を決める。事業終了後に到達度合をはかり、４段階で評価しその理由を記す。例を挙げると、「青少年を支える人を対象とした研修会」を実施する際は次のようになる。成果を「思春期の青少年が気軽に相談できる人材を地域の中に増やしていく」ことと定め、内容（手法）は「講座とグループワークにより理解を深め、参加者同士が関係性を結ぶこと」とする。指標は「参加者が思春期の青少年の特性を理解できたか」と「参加者同士が関係を結ぶことができたか」となり、アンケートによりそれぞれ参加者の８割以上が「達成できた」と感じたら「Ａ」評価、以下「Ｂ」「Ｃ」「Ｄ」と続く。根拠には、アンケート結果が使われアンケート項目に指標が反映される。

■挨拶ができれば良い？

会議で取り上げた事業の一つは「ロビーワーク」である。横浜市青少年交流センターでは、“目的を持たずに”来館した青少年を対象に「社会性」「自己肯定感」など、“対象の青少年に必

要と思われること”について、関わりを通じて育む取り組みのことを呼んでいる。詳しくは第１部・尾崎執筆の項を参照されたい。

さて、このロビーワークを評価するとどうなるだろうか。

冒頭の「ユースワークにおける評価の難しさ」は、そのままロビーワークの評価の難しさと言えるかもしれない。例えば、目標を「社会性を育む」、指標を「挨拶ができるようになる」とする。その結果は、「挨拶ができなかったＥ君が、スタッフの根気強い関わりにより心が通じ合い、毎回大きな声で挨拶ができるようになった」。この結果については「良かった」と素直に言えるが、これをどう評価するか。そもそも「挨拶」が社会性の指標として適切なのか。また、根拠が「Ｅ君の変化」だけでは、ロビーワークという事業全体の評価としてふさわしいと言えるだろうか。答えはなかなか出ない。

では、“分かりやすい”指標・根拠として数字をあげてみたらどうだろう。――「年間100人の青少年が、合計して1,000回挨拶できた」。

評価をめぐる４つの課題

相互評価会議の目的の一つは、「青少年事業の適切な『評価指標』を探る」ことである。意見交換では、評価指標をめぐる課題が４つあがった。

１つは「成果をどう定めるか」。「関わり」や「成果」の言語化・数値化が難しいだけでなく、明確化しにくく・結果が出るのが数年後ということも多い中で何を成果としたらよいのか。

２つ目は「ものさし」である。ヒアリングや観察による職員の“感覚”は評価のものさしになり得るのか。また、掲げた目標そのものの客観性をどうはかるのか。単年度や経年など「長さ」によっても評価視点は異なる。さらに、担当者によって評価に違いは出ないと言えるだろうか。

３つ目は「何を（で）評価するか」である。アンケートによる満足度の高い－低いがそのまま評価の高低に繋がるのか。数字は多い－少ないでよいのか。何の数字を使うのか。新規者・継続者、どちらが良いかは事業によっても評価されたいことによっても異なってくる。エピソード等の定性評価は何に活かせるのか。

最後は「何のための評価か」である。誰に向けたものか、評価をどう使うのか。フォーマットに沿って機械的に埋めているだけになっていないだろうか。この部分が決まらないと、評価すること自体が困難である。

青少年交流センターで実施した相互評価会議（2014.6）

「関わり」と「成果」から

４つの課題と照らし合わせながら、先ほどのロビーワークの評価事例を考えてみたい。まず、「100人」「1,000回」という数字が果たして多いのか少ないのか。これはものさしが明確でないため、根拠に妥当性があるとは言い難い。しかし、過去のデータや現状を分析した結果から出た「100人」ならどうだろう。ある程度の妥当性は保たれてくる。一方で、成果を数値化することに関し、会議では次のような意見が出た。「一人ひとりの変化こそ、ユースワークの評価。反面、『10人の青少年より100人の青少年を支援した』という“人数”の方が行政からの評価は高いのが事実」。公的な役割を担っている以上、多くの人が参加・利用できるよう努力することは当然だが、「数字で評価できるのか」とジレン

マを感じている職員は多いだろう。

次に、指標としてあげた「挨拶ができるようになる」について考えたい。これは、なぜ「挨拶ができるようになることが成長につながる」と職員が考えたのかが重要になる。単なるイメージではなく、データ等で示すことができれば指標となり得るのではないか。

■誰の、何の「満足度」なのか

会議では、青少年の社会参加事業の満足度を数値化し、評価指標にすることについての危険性についても触れた。「活動に参加したことで課題（例えば『自分はまだまだ力不足だということが分かった』など）が見つかったため、結果的に満足度が低くなったとしても“青少年支援”という観点からは高く評価できるのではないか」「満足しなかったのは、青少年が活動によって変化が見られたということ。そこをしっかりと説明すれば、“満足度が低い”ことに意味を見出せる」。このことからも、青少年の多くが挨拶できなかったとしても、そのまま評価を低くするのではなく、なぜ挨拶ができなかったか、その理由をしっかりと職員が分析できれば、別の観点で評価ができるかもしれない。また、「挨拶はできなかったが、自分が食べたものを片付けられる青少年が増えてきた」のであれば、それをどこにも記さずにロビーワーク事業の評価を「Ｄ」としてしまうことは、正当な評価とは言い難い気がする。根拠の見直しは必要だが、指標のみにとらわれずに変化を見ることができる視点も、職員には求められるのではないか。

こうしてみると、客観的妥当性の高い評価を目指していくには、目標・指標・根拠の一つひとつについて「なぜ、そうなのか」を分析すること、その根拠を日々記録し、しっかりと蓄積していくことが重要になりそうだ。

■事業の“本質”はどこに

手法はどのように関係してくるだろうか。職員が「どのように関わったのか」ということである。「挨拶できなかったＥ君が、スタッフの根気強い関わりによってできるようになった」という結果をもう一度見てみよう。ロビーワークの事業の本質はここにある。“根気強い関わり”とは、具体的にどのような働きかけだったのか、どれくらい時間がかかったのか、そして、なぜ職員はその手法で働きかけようと考えたのか。この記述では、これらの「職員の関わり」が一切見えてこない。この部分を、データを用いながらしっかりと言語化していかなければ、ロビーワークの評価は永遠に“数字”になってしまうかもしれない。

■効果の理由

重要性が分かっているにもかかわらず、私たちが評価指標を「100人が挨拶できるようになりました」としてしまいたくなるのは、「どの働きかけがＥ君にとって効果があったか」ということが明確でないからだ。経験により推測の精度が高まることはあるが、青少年本人に聞いてもはっきりとはしないだろう。その時の青少年の気分や「他の誰かから言われたから」かもしれない。イベントであれば、チラシを10枚より100枚配布した方が参加者が増える可能性は高まるが、ロビーワークのような関わりにおいては、関わりの量と成果が結びつくとは限らない。また、質さえも成果との結びつきは明らかにしがたいし、質が高い・低いという基準もあいまいだ。

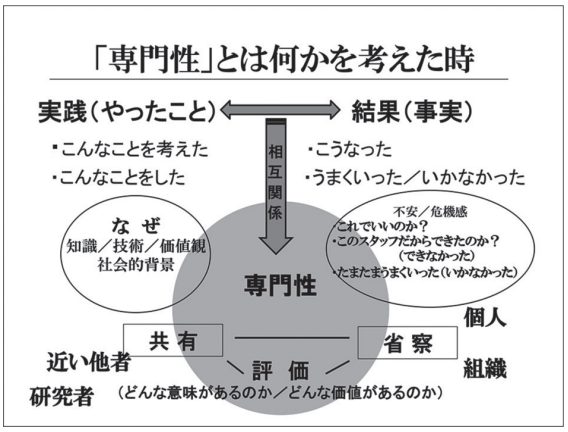
会議の中でも、「ユースワークの共通指標・共通基盤がないことが、評価が漠然となってしまう理由」「手法（関わり方）がその時々の担当者任せになっていることが、評価を難しくしている原因かもしれない」という意見が出た。しかし、参加者全員で改めて共有したのは「この“手法”にこそ、職員の専門性が強く表れている部分である」ということだ。では、ユースワークに関わる職員の“どんなこと”が専門性と言えるのだろうか。「共感力」「カウンセリング力」

「課題発見スキル」「記録し、分析する力」等々、職員の口から出た専門性はさまざまだ。はたして、共通指標や共通基盤を作ることはできるのだろうか。

ユースワークの「専門性」とは

相互評価会議では、事業評価の他に「職員の専門性」についての議論にも多くの時間を割いた。その中で、成果や漠然とした専門性を明らかにしていく手がかりは、「事業評価と専門性との関連性」にあるのではないかという意見が出た。これは、「うまくいった」と感じた実践を丁寧に紐解いていくことである。例えば、【図１】のように、職員が「いつ／どんな言葉を／何を感じ／どんな風に見立てて／どう行動し／省察したか」と、青少年が「何を言った／こんな行動をした」という実践の一つひとつと、「この時は何となくうまくいった」「この時はうまくいかなかった」という結果を記録し、分析していく。こうした、実践と結果の相互関係を積み重ねていくことで、成果やその時々に必要とされる専門性とが浮かび上がってくるのではないか。

【図１】



おわりに

６月・９月・11月と続いた３団体の相互評価会議が終わり、次年度は課題を整理していくことになる。私たちは今後何をしていけばよいのだろうか。その一つは「実践を蓄積し一般化していくこと」ではないかと考えている。事業評価においても専門性を明らかにする過程においても、日々の記録が重要であることが今回の分析から改めて理解することができた。

このように、実践と結果を丁寧に記録していくことの他、課題は何か、職員はどう考えどう対応したのか。これらをこと細かに蓄積しケースごとに一般化していく。今回、自己反省も含め振り返っているのは、私たちは、どこかユースワークが持つ個別性を、「暗黙知」という言葉を都合良く使うことで「評価が難しい」「言語化できなくて当たり前」と言い訳してきたところはなかったか、ということだ。また、注意しなければならないのは、けっして“マニュアルを作る”ことを目的としないことだ。実践は絶えず変化・進化していくのに、マニュアルという名前をつけると、私たちは変化に鈍感になってしまうことがある。個別性を大切にしながら、一般化できるものを探していくという作業を重ねていくことで、ユースワークの評価視点や専門性も徐々に見えてくるだろう。そしてこれが“生きた材料・資料”となり今後のユースワークに役立つと信じ、取り組んでいきたい。

最後に、感性が共有できて異なる視点を持つ２つの団体と、実践を分析し“価値づけてくれる”研究者とともに一つひとつの実践についてじっくりと意見交換できたことは、想像以上の視野の拡がりを実感することができた。職場内だけでは、気を付けていても視点が凝り固まってしまうことがある。今号のテーマは「人のつながり・人のひろがり」であるが、今回のように「評価しあい、高め合うことができる」仲間の存在とつながりは、人と関わる仕事にとっては必要不可欠だと言えるかもしれない。

【注】

（１）子ども・若者支援専門職に関する総合的な調査および研究を進め、「子ども・若者支援士」（仮称）の専門職化を目指すことを目的としている。事務局：奈良教育大学内。

あとがき

物を介した地域のつながり

昭和30年代、日本の高度成長社会が始まる当時は、醤油・味噌など物の貸し借りを通じて近所のつきあいがあった。しかし、昭和39年の東京オリンピックを境に、物を貸し借りする必要がないほど、人々の生活全体が豊かになり始め、生活に必要な物は家庭や個人が所有するものとなった。特にテレビなどの電化製品は一家に一台から、ひとり１台という時代になった。（作家の堺屋太一氏はある講演の中で、「家電から個電」という表現をされていた。）

豊かにはなったが、物を所有し始めると、今度はそれを一生懸命守るようになってしまった。結果、みんなでシェアする、分け合う、貸し借りする生活習慣が地域社会からなくなってしまった。物を半分にして分け合う「はんぶんこ」という言葉もいつの間にか使われなくなった。地域の人間関係だけではない。家庭の中の人間関係も次第に希薄になった。家族が一緒に食事をするという習慣さえない家族もあり、「一家団欒（いっかだんらん）」という言葉も死語となりつつある。

家庭機能の喪失と地域社会の再構築

虐待やネグレクトなどに象徴されるように「子どもたちを育む」という家庭の機能が失われ、家庭に代わって子どもたちを育む場の必要性が叫ばれている。かつては、他人の子どもであれ、子どもが悪さをすれば遠慮なく注意していた社会があった。しかし、今は注意をすれば、子どもやその親から逆切れされることもある社会である。物を媒介とした近所づきあいもなく、災害が起きても地域社会全体で乗り越えられるだけの関係性や結束もない現実がある。

家庭の機能が失われた今、それを補う地域社会の力がさらに必要になってきた。困難を抱えた子どもたちは、家にも学校にも自分の居場所がなく、成長できる機会や場を失っている。地区センターやコミュニティ・ハウスを居場所として子どもたちに提供している事例があるが、その居場所を継続的に支える大人も十分ではなく、居場所を存続させる地域力や組織化が大きな課題となっている。

その中で、磯子区の岡村地区の「子どもたちの幸せを実現する会」の活動は、地域の大人が学校に入り込むことで、学校の実情を知り、教員と連携しながら、青少年を見守る地域社会を築いてきた活動として注目すべき事例である。

地域の大人と子どもの関係づくり

放課後キッズクラブでは、地域の人たちにキッズクラブの子どもたちを知ってもらうため、さまざまなプログラムを展開し、そこに地域の人が参画できる仕掛けを作っている。大人と子どもたちが交流することで、「顔の見える関係」をつくり、大人と時間や場を共有することで、さまざまな学びの場を提供している。キッズクラブのA主任指導員の「小さな社会の入り口をキッズクラブを作っていきたい」という言葉は、子どもたちがキッズクラブの活動を通じて社会性を身につける場としてキッズクラブを位置づけていることの現れである。

泉区の「多文化まちづくり工房」の活動を今回取り上げさせていただいた。活動に臨む姿勢として、「社会を変えるんだ」という強烈な使命感がある訳ではないということがレポートされている。昔か

ら、ボランティア活動は使命感や理屈だけでは長続きはしないことはよく言われている。むしろ、「遊び」の要素をとり入れることで、子どもも大人も気軽に関われるような工夫が、相互の交流には必要ではないだろうか。

かつて私が関わっていた少年野球チームで一番楽しかったイベントは、「親子野球大会」であった。大人も子どもも夢中になって野球に興じるこのイベントは、大人も子どもも自分のありのままの姿を見せながら交流できる、楽しい時間であった。

このような「楽しさ」を感じる体験は青少年にとって大きな自己肯定感につながる。また、このような楽しい思い出があるからこそ、小学校を卒業しても近所で会えば、お互いに声をかけあったりする関係が続くのである。

居場所の新たな役割

平成14年度に設置された横浜市青少年交流センターは、青少年の居場所としてこれまでさまざまな機能を発揮してきた。居場所の意味は、「大人になるための助走期間」として、来館する青少年と大人が関係を作り、なにげない言葉の声かけや対話を通じて彼らの成長をサポートすることである。居場所という小さな社会にあってマナーやルールを教えることも大事だが、マナーやルールを教え込むことよりも、彼らとの関係性を築くことを優先する場面もある。また、最近では、様々な困難を抱える青少年の来館も多く、学習支援や行政、学校、専門機関と連携したサポート会議を通じて、困難さを軽減、解消していくことも求められている。青少年にとってその時必要な支援が受けられるようなサポートをすることも「居場所」の新たな役割となっている。

さまざまな社会資源との協働、ネットワーク

神奈川区で地域子育て支援拠点「かなーちぇ」を運営している代表の塚原さんには「場の力×ちえのわ・人のわ」を執筆していただいた。「子育て・子育ちを見守るまちづくり、風土づくりのためには、連合町内会を単位とした地域の地縁組織の理解・支援・連携が不可欠」と言いながらも、地域ケアプラザや地区センターなどの施設や区役所など社会資源との協働にも力を入れている。

さまざまな社会資源との協働、ネットワークは、資源が持つ機能や専門性を発揮することで大きな力になる。また、青少年を支える支援者同士が結びつくことも、青少年の課題を解決していく意味から、また心理的な負担を軽減し、元気をとりもどす意味からも重要なファクターである。当法人が運営している横浜市青少年育成センターでは、支援者を対象とした講座を実施する中で、支援者同士を結び付ける機会を提供している。支援者同士が結びつくことで、自分のこれまでの活動を振り返ったり、他の支援者の考え方や視点を学ぶことは支援者が元気に活動を続けることにつながるからである。

私達よこはまユースは、これまでも多くの市民や団体、ボランティア、行政とのつながりを大切にしながら、青少年育成活動を推進してきた。今後も青少年が多く大人に見守られる地域社会を築いていくため、青少年育成のための地域づくりを推進していくつもりである。そのためには、地域の青少年育成活動とつながり、それを広く発信するとともに、居場所スタッフや困難を抱える青少年に寄り添っている支援者など地域人材同士のネットワーク構築にもさらに力を入れたいと考えている。

YOKOHAMA EYE'S編集委員会　平野　嘉昭
（公益財団法人よこはまユース　施設部長）